

聞き書き 福田康夫元総理「中東」関係回想録

——認識と政策

I 解説

シナン・レヴェント

はじめに

- 一 丸善石油への就職
- 二 石油危機を前に中東を訪問
- 三 石油危機時の活躍
- 四 政治の世界へ…父の中東訪問補佐役時代と首相時代における中東
- 五 民間外交…日本・中東関係における民間人について

はじめに

本稿は、解説者（インタビュー）が現在従事しているプロジェクト「戦後日本の「中東」に対する認識と外交政策——資源保障論を超えて」のために、戦後日本の中東政策の主要な担い手の一人であった福田康夫元総理大臣から聞き取りをしたものと、それに対する解説である。このプロジェクトは、「民間」と「政治」との協力に焦点を当て、戦後日本外交における中東の位置づけと認識、その政策を考察する。

よく知られているように、福田康夫氏は、父赳夫氏の首相秘書官となり、第二次森喜朗内閣、第一次・第二次小泉純一郎内閣と、一二八九日間の長きにわたり内閣官房長官を務め、また初めて親子二代で首相に就任した政治家である。元来、康夫氏は二世として政治家になる運命にあったわけではなく、サラリーマン、それも石油会社の中堅として働いていた。一七年間サラリーマン生活を過ごした時、父・福田赳夫氏の後継者と自他ともに認められていた弟征夫氏が病氣になったため、突然政治家へ転身しなければならなくなった。⁽¹⁾石油会社勤務の経験が長かったため、戦後の歴代首相の中で、「民」と「政」の狭間における中東政策をもっとも意識・知悉する政治家の一人だと言っても過言ではない。福田康夫という政治家の持ち味は、正にこの点にある。従って、戦後日本の対中東認識・政策を取り上げる際に、彼への聞き取りは重要かつ必要であると言えよう。

これまで福田康夫氏自身の回想録はいくつかあるものの、中東に関するものは皆無に近い。これまでに刊行されている福田回想録と言えるものは、東アジアの国々との関係を中心とするアジア外交、消費者庁の立ち上げ過程、日本の人口減少問題と関連する長期国家ビジョン、日本の内外政策の最高決定者に関連する文書の扱いに関するものに限られている。管見の限り、中東についてのものとして取り上げられているのは三点ある。一つは、『季刊アラブ』に載せられた、福田元総理とアラブ協会会長の森川桂造との間の中東に関する僅か四頁の短い対談である。⁽⁶⁾

二つ目は、アジアを中心に、二〇〇三年三月からのイラク戦争への日本政府の支持表明の経緯とその実態についての講演会記録である。⁽⁷⁾ 三つ目は、イラク戦争への自衛隊派遣、そして国内外政治へのその影響など⁽⁸⁾について行われた聞き書きである。

従って、この聞き書きは、福田康夫元総理の中東に関する回想録として本格的かつもっとも詳しいものと言える。これは、福田氏が中東を如何に理解し、戦後日本における黎明期の対中東政策に民間人としてどのような形で関わったか、また政治家になってから日本の中東政策決定においてどのような役割を果たし、中東世界と如何に付き合ったかについて、実態を明らかにする記録である。

最後に、本インタビューが行われた経緯と、三回に分けてインタビューした記録をどのように統合したかについて、説明しておきたい。一回目のインタビューは、インタビューが二〇一八年四月、戦後日本における中東政策・認識についての面会を書簡にて福田氏に依頼したことによって実現した。一回目のインタビューに先立ち、インタビューは、福田氏が政界入りする前の経験や知識を中心とし、課題ごとに質問票を作って事前に福田事務所に送信した。

一回目のインタビューの終了後、インタビューは二回目の面会を福田氏に依頼した。冷戦期の中東に関する新しい質問事項を作成し、一回目同様、前もって福田氏に新しい質問事項を送信し、二回目の聞き取りを行った。

三回目のインタビューは、それまで聞いてきた冷戦期と違う、むしろ福田氏が官房長官と首相に在任した二〇〇〇年代の日本と中東との関係を中心に行った。こうして三回に分けて行った福田氏の聞き書きを、本稿の最後に添付した課題ごとの質問事項の流れに沿って統合した。

インタビュー記録の統合は、二、三回目の面会に備えて行った調査・研究の結果、新しく発見したことを質問事項として福田氏に改めて伺い、確認を取れた話を適宜後から一回目のインタビュー本文の中に入れ込むことによっ

で行った。当初、三回分のインタビューをそのまま掲載することも考えたが、そのままでは、その前の回のインタビューについての細かい字句修正も含めて記さなければならなくなり、読者には極めて読みにくくなると判断し、第一回目のインタビューを元に統合することとした。この作業によって、内容の正確さと統一性を損なわず、一つの流れとして読むことができるようになったと考える。また、三回分を統合した後で、原稿の最終版が出来る前に福田元総理に確認を取り、必要な訂正の御指摘を頂いた。福田元総理自身による訂正は、それ自体も本人の発言と捉え、忠実に反映した。

インタビュー本文の中の福田元総理の発言については、本人から特に指摘がない限り、表現も情報も原則的に修正せず、口語的なものもそのままにした。⁽⁹⁾

一 丸善石油への就職

一九三六年七月、東京府東京市に生まれた福田康夫は、一九五九年三月に早稲田大学第一政治経済学部経済学科を卒業し、大阪に本社を置く丸善石油株式会社（現…コスモエネルギーホールディングス株式会社）にサラリーマンとして就職した。石油会社に入った福田と中東との関係が、この時始まった。戦後日本の独立回復七年後に福田が石油会社に勤務したきっかけは、その個人的な歴史観から説明することが可能である。福田は、日本が米国に宣戦し世界大戦を戦った一番の原因は、石油だったと確信している。即ち、当時の日本が生きていくためには石油エネルギーの確保が必須条件であり、そのために日本は中国や東南アジアを侵略し、日本への石油の供給を遮った米国と戦ったという解釈を有しているのである。こうした歴史認識を持つ福田は、戦後になっても石油に対する思い入れが非常に強く、石油エネルギーの時代だと確信したからこそ、石油会社に入社したという。当時エネルギー業界の中で活発且つ積極的に活躍した石油企業が丸善であったと、今回の聞き書きにおいて回想している。

福田は入社当初、丸善石油株式会社の販売計画を担当する部門で働き、一九六二年三月から二年間、同社の東京本部から米国ロサンゼルス市にある支店に赴任した。一九六四年、帰国後に石油製品の輸入課長を務め、石油の価格・量の動向の予測・判断、産地国からの石油調達の輸入業務などを行った。サラリーマンとして石油を通じて中東に出会い、中東の人や文化に触れた福田は、当時の日本社会にとって距離的に遠く歴史的な接点も少ない中東諸国について、当時としてはよく理解していた。同社の石油調達部門で第一次石油危機を経験した福田は、この危機を戦後日本史の転換期であったと証言している。

二 石油危機を前に中東を訪問

周知のように、一九七三年一〇月の第一次石油危機が戦後日本の高度経済成長に終止符を打った。⁽¹⁰⁾ 日本経済は好況から不況に転じ、戦後最大の不景気を経験した。翌年の一九七四年、実質経済成長率は戦後初めてマイナスとなり、各企業も減量経営によってその体質を改善しようとした。⁽¹¹⁾ 石油危機は、イスラエルの建国と冷戦により中東で政治的緊張が高まる中、中東産油国が政治的・経済的要求を国際石油資本（メジャー）に押し付けるために、石油を本格的に武器として使ったことに始まったとされる。

実際には、一九五〇年代から、イランをはじめとする中東産油国は、国際石油資本、いわゆるメジャー⁽¹²⁾に対する自国の天然資源の国有化と公示価格値上げを主張してきたのであるが、その努力が本格的に実るには一九六〇年の石油輸出国機構（OPEC）と、それに続くアラブ石油輸出国機構（OAPEC）の設立を待たざるを得なかった。⁽¹³⁾

一九七〇年一二月にカラカスで開かれたOPEC第二回の総会における決議に基づいて、一九七一年二月にテヘランでペルシャ湾岸六か国と一五社の石油会社との間でテヘラン協定が結ばれ、所得税率と原油公示価格の五年間の引き上げが規定された。⁽¹⁴⁾ さらにリビアは再びメジャーに対して更なる引き上げを要求し、同年四月に国際石油

会社と新たな交渉を開始した。テヘラン協定の影響を受け、新しい要求を出したカタフィのリビアは、新条件で外国の石油会社とトリポリ協定を締結した。⁽¹⁵⁾ 一方、一九七二年一月サウジアラビアとアブダビの二か国は、OPECと国際石油資本との間の交渉を経て、石油採掘事業参加そのものを産油国側へ委譲することで合意した。⁽¹⁶⁾ 同協定により当初二五%の産油国の事業への参加が認められた結果、徐々に産油国側の事業参加の比率が高まり、一九八二年には五一%の参加比率が決められた。⁽¹⁷⁾

これらの一連の協定により、それまで中東の産油国に不利であった国際石油市場が変質し、産油国は自分の意思を価格に反映できるようになった。中東地域が国際市場に石油の供給地として浮上した一九三〇年代以降で初めて、現地の産油諸国は、メジャーを中心とするグローバルなメカニズムの中で、自国資源に対する主権を回復し、経営・収益・事業（＝資本）に参加することを現実的としたのである。

福田は、いわゆる戦後黎明期の中東を知る数少ない日本人の一人である。大学卒業直後から、一七年間も石油エネルギー業界で働き、一民間人として石油を通じて中東を理解していた。

日本の産業エネルギーが石炭から石油に変わった当初から石油業界で活躍し、エネルギー資源イシューを知悉する福田は、第一次石油危機が起きる前から中東への知識を有し、実際に一九七二年中東の地に足も運んでいる。当時丸善石油の調達部門にいた福田は、サウジアラビア、アブダビ、イランなどの中東産油国に、石油供給に関する調査のために派遣されたことがあるが、その際、場合によってはこれから石油が不足するかもしれないという危機意識をもった。さらに、戦後の国際経済・エネルギー秩序を主導したロックフェラー家のニュー・ジャージー・スタンダード石油会社をはじめとする国際石油会社の関係者とも、意見交換や事業交渉を行う経験を積んだという。

三 石油危機時の活躍

さて、メジャーと中東産油国との「石油戦争」に引き続き、アラブ中東国で非産油国のエジプトとシリアの両軍は、第三次中東戦争でイスラエルに奪われた領土の回復を目的に、イスラエルに対して軍事・政治攻撃を開始した。その結果、一九七三年一〇月第四次中東戦争が勃発し、それまでメジャーを通じて安全で大量に輸入されていた石油の供給は、第二次世界大戦後初めて危ぶまれることになった。アラブ諸国から非友好国として扱われ、石油供給削減に直面した日本は、第四次中東戦争勃発以降、中東諸国とあらゆる形態の取引を直接に行うようになり、中東に対する認識・政策が不十分であることを痛感した。それまで中東に対する理解度が低く、外交政策における分析も浅かった日本は、石油危機において独自に「アラブ寄り」と言われる外交政策を取った。具体的には、同年一月のイスラエルの占領地からの全面撤退を呼びかけて中東政策の積極的な転換をもたらした二階堂官房長官談話、一二月の副首相の三木武夫を団長とする外交ミッションの中東諸国への派遣、さらに国際赤十字の要請に応えて行ったエジプト軍負傷兵救援のための献金などである。⁽¹⁹⁾これらの一連の外交を経て短期間の内に友好国として認められた日本には、石油が正常に流れるようになった。

元来、日本は第一次石油危機前後に石油の九五%以上を海外から輸入し、その約八〇%がイラン、サウジアラビア、クウェートといった中東諸国からのものであったため、エネルギー資源の面では外国、特に中東に対する依存度が高かった。⁽²⁰⁾当時中東産油国に対する日本の依存は、他の先進工業国のそれをはるかに上回っていたのである。⁽²¹⁾

当時の日本の中東に対する政策や認識において、中東への依存性より、石油を調達するメジャーへの依存心の方が強かったことも事実である。「メジャーにお金さえ出せば石油が入ってくる」という意識が、一九七三年の石油危機までの日本における政・官・財に共通の意識であった。⁽²²⁾しかし、中東産油諸国とメジャーとの間の利権問題に

巻き込まれた日本は、石油エネルギーの欠如を戦後初めて実感したのである。それまでメジャーを通じて輸入した石油に依存してきた経済発展が停滞する危機に直面した日本は、メジャーと産油国との間の利権問題を自国のエネルギー問題として外交の最優先課題として見るようになり、真正面から同問題に対処することになった。その結果、エネルギー資源専門の会社はもちろんのこと、民間団体から政治家まで様々な分野の人・組織が全力を發揮し、石油危機を乗り越えるように積極的に努めた。

丸善石油の社員であった福田も、その一人であった。福田は一九七三年の第四次中東戦争時に原油調達のためソ連に行き、ソ連の輸出公社の総裁と一対一で値段交渉をしたという。当時日本では、OPECが石油供給削減政策を実施した結果、輸入量が減少するのではないかと不安が生じていた。丸善石油の代表としてソ連に原油調達交渉に当たった福田は、値段が日々に上がっていく中、通常では考えられないような倍程度の値段で、ソ連の公社からの調達に成功し、それが結果的に大変な利益をもたらすことになったと後に振り返っている。⁽²³⁾

四 政治の世界へ…父の中東訪問補佐役時代と首相時代における中東

福田康夫は一七年間サラリーマンとして丸善石油に勤務した後、一九七六年十一月に同社を退き、父である衆議院議員福田赳夫の秘書となった。翌年一月から一年間は、その内閣総理大臣秘書官を務めるようになり、日本のトップレベルにおける経済・内外政策に間接的に関わり始めた。

大蔵省官僚であった父福田赳夫は、一九四八年の昭電疑獄事件に関わったのを機に一九五〇年十一月に退官し、しばらく浪人の身であった。その間家族や同級生に刺激を受け、地盤もないまま政界進出を決めた⁽²⁴⁾と回想している。一九五二年一〇月の第二五回衆議院議員総選挙に群馬三区から無所属で立候補・当選し、四七歳で衆議院議員となった。政界に入ってから岸信介と行動を共にし、一九五九年一月から岸総裁の下で自民党幹事長を務め、

同年六月第二次岸改造内閣に入閣した。岸は若手政治家としての福田赳夫を大切に育てようとし、安保改定を仕上げるための岸政権最後の内閣人事改造でもある「五九・六人事」に農林大臣として福田を入閣させたのである。⁽²⁵⁾ 岸はもともと信頼・重用した側近の一人、いわゆる「二番のブレーン」⁽²⁶⁾であるスタッフメンバーとして福田を定義し、特にその政策的な考えが素晴らしいと評価していた。一九五二年から一九九〇年まで衆議院議員を務めた福田赳夫にとって、最も重要なのは、間違いなく一九七六年二月から二年間首相をつとめたことであろう。福田赳夫は、現役の総理大臣としては最初に中東を正式に訪問した。一九七八年九月五日から一二日までの中東訪問においてイラン、カタール、アラブ首長国連邦、サウジアラビアを歴訪した。⁽²⁷⁾

こうした福田赳夫の議員引退までの一四年間をその傍で支えたのは、石油会社でビジネスの経験を積んだ息子の康夫であった。実際に丸善石油を辞める直前から、父の政治の仕事を手伝っていたという。父の下で国内外政治・経済のことを学びながら政界入りの準備をしつつ、康夫は一九七八年九月の父の中東訪問に同行はしなかったがその準備に参画し、石油会社で重ねた中東に関する経験を活かしている。

福田康夫は、議員になる前、首相秘書官として、日中平和友好条約へ向けた中国、アメリカとの舞台裏交渉、さらに日本外交の多角化を目指した「全方位平和外交」の一環として東南アジア外交にも関与した。⁽²⁸⁾ 父の下で経験を積んだ康夫は、一九九〇年（平成二年）父の引退と共に、群馬三区から衆議院議員選挙に出馬して初当選し、その後五回連続当選した。当選一回生として行った国際活動の一つは、湾岸戦争直後に機雷除去のために中東に派遣された日本の掃海艇の自衛隊員を、現地で激励することであった。これについては、今回の聞き取りで具体的に語られている。

その後福田は、外務政務次官（一九九五年）、自民党外交部会長（一九九五年）、同副幹事長（一九九七年）、自民党政務調査会副会長（二〇〇〇年）などを経て、二〇〇〇年一〇月に第二次森喜朗内閣の官房長官に就いた。二〇〇

一年四月に組閣された第一次小泉純一郎内閣でも、引き続き官房長官に就任した。先述したように、福田康夫は、二〇〇四年五月の辞任まで三年七ヶ月（総計一二八九日）官房長官に在任し、戦後の日本政界で歴代官房長官の中で二番目に長く在任した政治家である。⁽²⁹⁾

二〇〇七年七月の参議院議員選挙で安倍晋三率いる自民党が敗北し、その責任をとって安倍首相が同年九月一二日に突然辞意を表明した。福田康夫はその後継者として総裁選挙に出馬し、麻生太郎前自民党幹事長を破って、同月に自民党第二二代の総裁になり、続いて同月二五日に第九一代の内閣総理大臣に就任した。⁽³⁰⁾ 福田康夫が首相になることによって、憲政史上初めて親子二代の首相が選出されることとなった。

父・福田赳夫の地盤・人脈を引き継いだ康夫は、岸信介元総理の後継派閥の清和会の指導者だったため、政治家としての中東との付き合いがイデオロギー的な観点によるものであると思われるかもしれないが、実際には現実主義的な資源論者であり、政策重視の傾向が強かった。

福田康夫は中東との民間外交を大事にし、歴代首相の中で初めて首相自ら首相官邸で民間企業の契約署名式に立ち会った政治家である。それは具体的には、二〇〇七年一月一七日にコスモ石油や丸紅商事などが、アラブ首長国連邦のアブダビ首長国とエネルギー事業契約を締結したセレモニーであった。⁽³¹⁾

福田は、首相時代、中東諸国の中でも特にアブダビ首長国との関係に力を入れていたことが伺われる。アブダビ首長国は、福田政権当時（二〇〇七年二月）の日本にとって、サウジアラビアに次ぐ第二位の原油調達国であった。このため福田は、日本国首相としてアブダビとの友好関係を強化し、三〇億ドルをUAEの国営石油会社（32）に融資する事業に乗り出した。⁽³²⁾ 石油危機時に石油業界の現場で原油の安定的な供給の必要性を肌身で痛感した福田は、首相に就任してからアブダビと原油確保に向けての関係を強化した。また、これに加えて、福田がアブダビ首長国とこうした原油供給の安定化を固める方針を打ち出した背景には、父赳夫以来のザイド・ビン・スルタン・ア

ル・ナヒヤーン（アラブ首長国の首長でアラブ首長国連邦の初代大統領）やその三男ムハンマド・アブダビ首長国皇太子との個人的な関係もあったと考えられ、それらのことは聞き書きの中にもよく現れている。

なお、今回のインタビューでは、湾岸危機、イラク戦争、米国のアフガン戦争について特にイラク戦争が勃発した前後から自衛隊の中東派遣までの政策決定経緯を、日本政府の当事者であった福田から直接に話を聞き取ることができた。湾岸戦争当時、福田康夫は衆議院議員になったばかりであり、ペルシャ湾周辺の掃海作業のために中東に派遣された自衛隊の隊員たちの激励のために現地まで行き、当時激しく批判された自衛隊の海外派遣について、自民党の中でも好意的なグループの一員であった。⁽³³⁾

周知のように、イラク戦争の際の自衛隊の中東派遣が合憲であったかどうかについては、活発な議論が行われている。興味深いことに、この問題について福田は、自衛隊員が海外で戦闘行為をしない限り、海外への派遣には問題がなく、また、戦闘相手が国ではなくテロリストであったため、国家間の争いである戦争行為はなかったという解釈をしている。従って、福田は、イラク戦争への自衛隊の派遣と憲法九条との矛盾はなかったと確信している⁽³⁴⁾のである。

五 民間外交…日本・中東関係における民間人について

民間外交における「民間人」とは、何か。民間人は、国家の正式外交主体である「外務機関」、つまり「官」と協力して行動を共にする場合もあれば、官・政と公共目的を共有しながらも対外交流・交渉を独立・独自に行うケースもあり、両者の間にギャップあるいは対立が生じた場合も存在する。戦後対中東外交に関しては、「官」と「民」が公に共働したのは非常に稀であり、むしろ「政」と「民」は正式の場では一定の距離を保ちながら裏面で密接な関係を有していた。

中東諸国との外交を考える際、今回の福田元総理からの聞き取りにおいて言及がなされた、田中清玄（一九〇六～一九九三）・中谷武世（一八九八～一九九〇）・山下太郎（一八九九～一九六七）ら民間人の政治的人脈を無視することは出来ない。また、中東には伝統的な独自の政治文化があり、非公式の人間関係が非常に重要視され、コネクションによってビジネスや外交交渉の成否が決まるケースが少なくない。一九五〇年代のエジプトのアスワン・ハイ・ダム（35）の日本人技術者による建設の試みに、中谷武世とナセル大統領との間の親しい個人的関係が作用したことは、その一例である。さらに、サウジアラビアを中心とする湾岸諸国の政治・社会制度において、宗教、即ちイスラームの存在が重要であることは言うまでもない。また、サウジアラビアでアラブ石油会社の重役だった林昂（一九一六～二〇一七）がイスラーム教に改宗した（ムスリム名はオマル・ビン・ムハムマド）ことにより、彼はサウジ王室や民間のアラブ人の心をつかむことが出来た。林がサウジアラビア駐在の日本人大使よりも王室に対して顔が利いていたことは、サウジと何らかの形でかかわりのある冷戦期の日本人の間では良く知られている話である。（36）その他、山下太郎と同じく、戦後資源エネルギー業界にあって日本と中東を結ぶ存在として、杉本茂（一九二一～一九七九）も注目する。

丸善石油の副社長であった杉本茂は、田中清玄と中山素平（一九〇六～二〇〇五）らによる日本自主原油開発油田確保計画に基づき、（37）アラブ首長国連邦のアブダビで石油権益を獲得した事業をベースとして、一九六八年一月一七日に日本でアブダビ石油株式会社を三間安市（一九〇三～一九七四）と共に設立した。福田康夫は、こうした杉本茂について、今回の聞き書きの中で貴重な発言を残し、彼の独自のビジネス思想は自分が丸善石油に入社する際の大きな刺激となったと回想している。杉本に関して、バルカン政治家と称される元首相の三木武夫が「こせこせしたところが少しもない、器量の大きい人物だった」と語る一方、（39）戦後日本の金融界の中心人物の一人である中山素平は「異色の財界人でした（中略）経済人として卓越した先見性を備えておられ（中略）丸善石油を辞められた

時、この人を生かすべきだと信じてアブダビ石油に推薦しましたが、彼の活躍、功績は大変な物でした」と振り返っている。⁽⁴⁰⁾

杉本茂は日本の石油業界で多くの人に信頼され、ビジネス・ビジョンにおいて卓越していたが、それだけでなく、上記の様に、政界のみならずビジネス・経済界でもその人物が高く評価されていたのである。中山素平によりアブダビ石油権益獲得事業に推薦された杉本は、田中清玄と共にこの事業で成功した結果、アブダビ石油の副社長として戦後日本の石油業界に大きく貢献している。

アブダビ石油の設立につながっていくアブダビ首長国からの石油開発権利獲得には、田中清玄の役割も大きかった。田中とアブダビとの関係は一九六七年に始まり、田中はカタルやクウェートのように中東地域の小さい産油国の首脳部とも親しかった。⁽⁴¹⁾ 英国の統治下にあった時代のエジプトで英国の大使を務めたサー・ジョージ・ミドルトンから一九六七年アブダビ首長国のシェイク・ザーイド・アブダビ首長に紹介された田中は、一九六〇年代後半、石油に乏しい日本への原油確保のために中東で油田入手の活動を行い、ザーイド首長と油田開発権を獲得するための交渉を始めた。田中が最初の本格的な交渉の為に現地に連れて行った日本人の専門家は、杉本茂であった。⁽⁴²⁾ 戦後日本においてエネルギーと食糧に関する仕事を自分のミッションとした田中は、その二つの分野で全力を発揮することによって、母国たる日本の復興・発展だけではなく、国際社会にも貢献する⁽⁴³⁾ことを決めたという。

こうした田中の果たした役割に対して、今回のインタビューにおける福田の言動は慎重であった。前述した杉本茂や後述する中谷武世ほど、評価は高くなかったことが印象的であった。それには理由があると思われる。周知のように福田康夫は、岸派を受け継いだ父・福田赳夫の影響を受け、同じ政治色のある清和会の政治家として活躍した。そのため、岸やその側近を「嫌悪している」と明らかに言明している田中清玄とはあまり接点がなかったのではないだろうか。

一方、上述した民間人の中で、戦後の対中東政策においてもっとも政治色が強く、政治家ともっとも密接な関係を有していたのは、間違いなく中谷武世である。中谷は、戦後、改進黨・日本民主党系から自民党設立に関わり、日本アラブ協会会長や自民党相談役として隠然たる影響力を持った。そして衆議院議員を一期経験したに過ぎないながらも、勲一等瑞宝章を受けた。彼は、岸信介、中曽根康弘、福田赳夫、三木武夫らの政治家と親しく付き合う一方で、「吉田路線」や田中角栄を批判した。そして、戦後日本外交を、資源保障論からだけでなく、「中東」を戦後日本外交の軸としての「アジア地域」として位置づけ、「吉田路線」とは異なる日本外交を打ち立てようとした。中谷は、平凡社を創立した下中弥三郎（一八七八～一九六二）や当時若手衆議院議員であった中曽根康弘と一九五七年中東を訪問し、クワトリ・シリア大統領やナセルエジプト大統領などのアラブ諸国首脳と会合している。⁽⁴⁴⁾中谷は、中東のアラブ民族運動、特にパレスチナ解放問題に協力することや日本政界の関心をそこに向かわせることを自分のライフワークとし、⁽⁴⁵⁾中東和平に関しては「イスラエルに近いアメリカの態度に協力すべきじゃない」と明確に述べている。⁽⁴⁶⁾

こうした中谷と福田康夫との関係は、父福田赳夫を通じて築かれたようである。中谷を高く評価する福田康夫は、日本における「中東の元年」とも呼称すべき一九七三年の第一次石油危機の前から中谷と付き合い、彼のことを、当時の日本にとって未知の中東世界へのパイプ役を担ってくれた重要人物だと捉えている。

このように、福田康夫は石油会社勤務の原体験に基づいた石油資源論をその一つの対中東認識・政策の根幹としつつ、それ故に、中東との関係における民間人の役割を重視しているのである。

戦後日本の中東外交においては、政治家と民間人との相互作用が存在し、それが重要な役割を果たした。戦後日本外交の中に中東を位置付ける際には、従来の中東研究で行われてきたような制度的な外交ルートだけではなく、民間人と政治家との関係も十分に解明して正當に評価することが必要であり、その点でも、福田康夫の今回の回想

は貴重であると考えられる。

付記：このインタビューと解説は、JSPS特別奨励研究（外国人特別研究員）課題番号 17F17011「戦後日本の『中東』に対する認識と外交政策——資源保障論を超えて——」の成果である。

- (1) 御厨貴「政治の眼力―水田町「快人・怪物」列伝」文芸春秋、二〇一五、二〇〇頁。
- (2) 福田康夫「国民交流の深化が拓く新時代の日中関係」『月刊 経団連』二〇二二年四月、三〇―三三頁。「アジアを動かした」福田ドクトリン」の三〇年「ワセタアジアレビュー」一号、早稲田大学アジア研究機構、二〇〇七、一八―二三頁。
- (3) 福田康夫「福田康夫元総理 消費者庁立ち上げを語る―福田康夫元総理へのインタビュー」原早苗・木村茂樹（編）『消費者庁・消費者委員会創設に込めた想い』商事法務、二〇一七、一―六頁。
- (4) 福田康夫・五百旗頭真・増田寛也・清家篤（新春座談会）「人口減少受け止め 長期国家ビジョン」『アジア時報』一般社団法人アジア調査会、二〇一八年三月、三三―四二頁。
- (5) 福田康夫「特別インタビュー 公文書の扱いとその国のかたち」『ライブラリー・リソース・ガイド（LRG）』二〇一七、冬号（第一八号、一一四―一九頁）。
- (6) 福田康夫・森川桂造「一六〇号記念対談 アラブとの交流を推進しよう」『季刊アラブ』一六〇号、日本アラブ協会、二〇一七、二―五頁。
- (7) 福田康夫・五百旗頭真「乱世の世界と日本―二二世紀をどう生きるか」『アジア時報』通巻五一九号、一般社団法人アジア調査会、二〇一六年九月、三二―三五頁。
- (8) 福田康夫・衛藤征士郎「一国は一人で興り、一人で亡ぶ」ベストセラーズ、二〇〇五、七六―八六頁。
- (9) 例えば、福田元総理による中国の原油輸入先についての説明（インタビューの三の最後）では、中国の中東依存度がアフリカへより低いとされているが、実際には近年の中国も日本と同じく、中東地域が同国の原油輸入先の構成で一位を占めている。具体的には二〇〇三年・二〇〇四年の時点でも湾岸地域からの原油輸入はサブサハラ・アフリカの二倍程度であり、二〇〇九年に三倍以上となっている。さらに、二〇一六年・二〇一七年の時点においても湾岸への依存度がサブサハラ・アフリカ地域より二倍程度であった（大阪産業大学経済学部教授の横田高明の論文を参照「中国のエネルギー需給動向と北東アジア―原油・製品油を中心にして―」<http://www.eco.osakasan-dai.ac.jp/ACRC/report/2007/0908.yokota-JP.pdf>（アクセス：二〇一八年九月二四日）。さらにジェトロ・アジア経済研究所のデータを参照、「中国と湾岸地域：原油を軸とした関係とその発展」http://www.idc.go.jp/library/Japanese/Publish/Periodicals/Me_review/pdf/201710_01.pdf（アクセス：二〇一八年九月二四日））。

- (10) 栗田康之・宮崎晃臣「日本経済の歩み」SCIME (編)『現代経済の解説―グローバル資本主義と日本経済―』御茶の水書房、二〇一七、一七一―一七三頁・宮崎嶋。「座談会―復興過程と高度成長期―」エコノミスト編集部「高度成長期への証言 下」東京・日本経済評論社、一九九九、三九〇頁。
- (11) 中村隆英「日本経済―その成長と構造―」東京大学出版会、一九九三、二二八―二四三頁。
- (12) 国際石油市場を主導する多国籍資本について詳しく参照: Anthony Sampson. *The Seven Sisters - The Great Oil Companies and The World They Shaped*. Coronet Books, Hodder and Stoughton, 1975.
- (13) 即ち、石油輸出国機構は一九六八年一月の第一七回総会で、原油公示価格は油質や消費地への距離などを考慮したうえで決めるべきであると決議したのである。産油国の中でこれに直ちに答えたのはリビアである。当時のリビア政府は、リビアの石油は低硫黄である上にヨーロッパにも近いという利点を掲げて、一バレル当たり四〇セントの公示価格の引き上げをリビアにある国際石油会社に対して、公示価格とともに、初めて所得税率の引き上げも要求した。翌年九月アメリカ系のオクシデンタル石油会社に公示価格と所得税率の引き上げを認めさせることに成功したりリビアは、引き続き他社にもその要求を押し付けることとした。リビアの動きに促された中東の他の産油国と西アフリカのナイジェリアも、国際石油資本、いわゆるメジャーと激しい交渉を経て、原油公示価格と所得税率を引き上げること成功した。参照、山村喜晴『戦後日本外交史V―経済大国への風圧―』三省堂、一九八四、一九九頁。
- (14) 同上、二一〇頁。
- (15) Ian Seymour OPEC: *Instrument of Change, the Macmillan Press*, 1980, 55~97.
- (16) 白鳥潤一郎『経済大国』日本の外交―エネルギー資源外交の形成 一九六七―一九七四年―千倉書房、二〇一五、二二六頁。
- (17) さらにテヘラン協定が結ばれた年の八月にフロン・ショックが起こること、OPECも公示価格の表示通貨であるドルの購買力低下を補償するべく、原油公示価格の引き上げを国際石油会社求めた。翌一九七二年一月にジュネーブで中東産油国と国際石油会社との間でジュネーブ協定が締結されさらにドルの変動が一層激しくなると、一九七三年六月に原油公示価格を調整するように内容が更新された。参照、山村、前掲書、二〇一、二〇二頁。
- (18) 田村秀治『アラブ外交五五年下―友好ひとすじに―』勁草書房、一九八三、二二七―二二九頁。
- (19) 石川良孝『オイル外交日記―第一次石油危機の現地報告―』朝日新聞社、一九八三、二二三頁。
- (20) Hiroshi Shimizu, "The Japanese trade contact with the Middle East", Kaoru Sugihara and J.A. Allan (edit.) *Japan in the Contemporary Middle East*, Routledge, 1993, 27; Kazushige Hirasawa "Japan's Tilted Neutrality", J.C. Hurewitz (edit.) *Oil, the Arab-Israeli Dispute, and the Industrial World*, Westview Press, 1976, 138.
- (21) 日本の他の主なエネルギー資源は、石炭 (一六・三%)、水力発電 (二・六%)、天然ガス (一・一%)、原子力発電 (〇・九%) であった。参照、Kazushige 同上、二〇六頁。

- (22) Michael M. Yoshitsu *Caught in the Middle East - Japan's Diplomacy in Transition*. Lexington Books, 1984, 1~2.
- (23) 福田康夫・森川桂造「一六〇号記念対談：アラブとの交流を推進しよう」日本アラブ協会「季刊アラブ」一六〇号、二〇一七、二一五頁。
- (24) 福田越夫「回顧九十年」岩波書店、二〇一四、八三〜八九頁。
- (25) 原彬久「戦後政治の証言者たち―オールラブルヒストリーを往く―」岩波書店、二〇一五、一二四〜一四五頁。
- (26) 岸信介・矢次一夫・伊藤隆「岸信介の回想」文芸春秋、一九八一、一六三〜一六五頁。
- (27) 村田良平「村田良平回想録―戦いに敗れし国に仕えて―上巻」ミネルヴァ書房、二〇〇八、二七六〜二七九頁。
- (28) 福田越夫元総理大臣の外交政策については、若月秀和「現代日本政治史④ 大國日本の政治指導 一九七二〜一九八九」吉川弘文館、二〇一二、八〇〜一〇三頁。若月秀和「全方位外交の時代―冷戦変容期の日本とアジア一九七二〜一九八〇―」日本経済評論社、二〇〇六、一五四〜二四頁。
- (29) 首相官邸・福田総理プロフィールを参照、<https://www.kantei.go.jp/fukudaprofile/sokusekitext.html>（アクセス：二〇一八年八月二八日、午後一五時三十分）。現在の在任日数歴代トップは菅義偉である。
- (30) 工藤泰志（編）『福田政権の一〇〇日評価』言論NPO、二〇〇八、六頁。
- (31) 『産経新聞』「アブダビと民間事業署名式、異例の首相同席 原油調達、強力サポート」東京朝刊、二〇〇七年二月一七日付、総合二面。
- (32) 『産経新聞』「UAEと関係強化 原油確保へ三〇億ドル融資」東京朝刊、二〇〇七年二月一八日付、経済面。
- (33) 湾岸戦争の際、日本政府の政策決定経緯・実態について参照、板垣雄三（編）『中東湾岸戦争と日本』第三書館、一九九一、折田正樹「外交証言録 湾岸戦争・普天間問題・イラク戦争」岩波書店、二〇一三、一二一〜一四六頁。
- (34) 福田元総理はイラク戦争への小泉政府の支持表明の過程について二〇一六年のアジア調査会の講演会でも既に触れている。福田・五百旗頭、前掲論、三二〜三五頁。イラク戦争と自衛隊の派遣については、森本敏「イラク戦争と自衛隊派遣」『東洋経済新報社』、二〇〇四、大石庄一「日本の平和と民主主義を問う―イラク戦争・自衛隊イラク派遣との関連で―」横濱商科大学公開講座委員会（編）『民主主義の現在』南窓社、二〇〇五、一八九〜二〇五頁。永井浩『ポスト真実』と対テロ戦争報道メディアの米米同盟を検証する―明石書店、二〇一八。
- (35) 中谷武世「アスワンハイダムを日本の技術で」『民族と政治』二六号、一九五七年八月、四〜五頁。中谷武世、下中弥三郎、中曽根康弘、その他「アスワン・ダムを日本の技術で」『民族と政治』二七号、一九五七年九月、二八〜五二頁。中谷武世、下中弥三郎、中曽根康弘、久保田豊「久保田豊氏にアスワン・ハイダムを訊く」『民族と政治』二七号、一九五七年九月、六六〜八〇頁。
- (36) 林昂「―林昂氏 インタビュー― アラブとの七〇年 利己を超えて普遍なるものへ」サウジアラビア大使館文化部（編）『サウジアラビアと日本―その素顔と絆―』サウジアラビア王国大使館、二〇一〇、一三〜一四七頁。
- (37) 中山素平・田中清玄「第八章・石油危機への対応」鎌田勲・高村壽一（編）『証言・戦後経済史―あの時の真実』日本経済新聞社、一九八八、二〇五〜二二五頁。

また、アブダビ石油利権獲得過程への田中清玄の関与について詳しく参照、田中清玄『田中清玄自伝』文芸春秋、一九九三、二三五〜二六二

頁・田中清玄一九八一年三月一五日。「私のエネルギー人生―アラブの国王との交友を赤裸々に告白―」『臨時増刊財界』二九(6)、一四四～一四九頁。

(38) アブダビ石油株式会社の設立過程について同社の正式なサイトを参照、<http://adocets.conet.joho/02/> (アクセス:二〇一八年八月二七日)。

(39) 三木武夫「友人・杉本茂君を偲ぶ」杉本茂追悼集刊行委員会『炎の軌跡 杉本茂』内外問題研究所、一九八〇、二四～二五頁。

(40) 中山素平「スケールの大きな人」、同上、二九頁。

(41) 田中、一九八一、前掲論、一四六頁。

(42) 同上、一四七頁。

(43) 東京大学法学部附属近代日本法政史料センター・原資料部・田中清玄関係文書(アブダビ・エネルギー関連事業)、「Preface by Seigen Tanaka」(英文タイプコピー二枚) (T-3-52) 一九七五、三～四頁。

(44) 中谷武世『アラブと日本―日本アラブ交流史―』原書房、一九八三、ii、iii、三頁。

(45) 中谷武世『昭和動乱期の回想―中谷武世回顧録 上』泰流社、一九八九、七九～八〇頁。

(46) 中谷武世「アラブは一つ」『民族と政治』八月号、一九九〇、四～七頁。

Ⅱ インタビュー

インタビュー…福田康夫元総理
インタビュー…シナン・レヴェント

（二〇一八年五月二日（水）・二〇一八年八月一七日（金）・二〇一八年九月七日（金） 於…福田康夫事務所）

- | | | | |
|---|-------------------|----|---------------|
| 一 | 中東の定義について | 一〇 | 福田康夫首相と「中東」 |
| 二 | 日本社会のイスラーム概念について | 一一 | イラク戦争について |
| 三 | 日本の中東政策における要点について | 一二 | イランとの関係について |
| 四 | 戦後日本のアジア外交と中東 | 一三 | アフガニスタン問題 |
| 五 | 湾岸危機について | 一四 | 民間外交について |
| 六 | 福田赳夫と中東 | 一五 | 中東民間外交のキーパーソン |
| 七 | 福田康夫と「中東」との出会い | 一六 | イスラエル・パレスチナ問題 |
| 八 | 政治家への転身 | | |
| 九 | 石油危機について | | |

福田…はい、どうぞ。

レヴェント…本日はお忙しい中、お時間を空けて頂きましてありがとうございます。今日は戦後日本における中東認識・政策について伺わせて頂きます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

一 中東の定義について
レヴェント…まずは中東の定義なのですが、中東とはアラ

ブ諸国、イスラエル、ペルシャだけではなく、アフガニスタン、パキスタンや中央アジア諸国も中東の一部という見解もあります。つまり広域中東という概念。こうした輪郭がない定義については、いかがお考えでしょうか。

福田…これは悩ましいことです。その都度悩むことがある。いったいどこまで中東なのか、どこからどこまでかなと迷います。いまでもそうです。はっきりした定義、明確な定義は、おそらくないでしょう。

われわれはアジアの一部、西のアジア、そういうふうにも考えておりますし、その時々の中で、都合のいいように解釈するという便利なところがあるね(笑)。もちろんアフガニスタンとかパキスタンとか、あのへんの地域のことも含めることもありますよ。アジアと中東と分ける人が一般的には多いかもしれない。ではその境界はどこかというところ、そこはよく分からないという印象を持っています。

エジプトはアフリカにあるけれども、ではエジプトはどうなのか。あれは中東なのでしょうね。せいぜいそのへんぐらいますが、中東の一番南端と皆さん理解しているのではないのでしょうかね。東の方は曖昧。ですから全部ひっくるめてアジアと言ったら一番分かりやすい。

レヴェント…中東の定義については中東地域＝イスラーム

圏という見解もありますが、福田総理はどうお考えでしょうか。

福田…そういう見方もある。しかしそういうと、たとえばインドネシアのような大国もあるし、マレーシアもあるし、正直に言つてごちゃごちゃしていますよ。そういうものの混在しているのが、アジアであるということじゃないでしょうか。

でも、そういうふうに混在しているから、逆にうまくいくこともあるわけだね。たとえばASEANの中でも、そういうイスラームの国もあると。仏教の国、いろいろな宗教がありますが、みんな混在して仲良くやっていると。ASEAN一〇カ国は、そういうことができる地域なんですよ。

二 日本社会のイスラーム概念について

レヴェント…次の質問に移ります。日本社会の一般的な認識上、中東とイスラームが不可分の概念として捉えられているかと思えます。日本のある大学で学生に、中東のイメージを三つのキーワードで書いてというアンケートが行われたらしくて、それで、やはり答えは「怖い」とか「イスラーム」とか「宗教」が必ず出てくるということです。

「中東＝イスラーム」という認識を理解するためには中東

の国際的な認識でいうと、一九七九年は重要な年です。一九七九年のイラン革命、いわゆるイスラーム革命以降中東とイスラームは国際的に同一視されてきたことは通説だと思います。これは現地の政情にも連動した点です。一九七九年のイラン・イスラーム革命まではアラブ民族団結という民族優先の意識が強かったが、イラン・イスラーム革命以降イスラームはもうどの世界でも、いろいろなところで前面に出てくるようになった。ところが、日本は世界と異なって、イラン・イスラーム革命の一般認識への影響は皆無に近いです。あとあとになって、中東とイスラームという概念は、同じ枠組みの中で考えるようになったという気がします。

イスラーム概念に関する戦後日本社会の一般認識については、小生はこう考えます。まずは、やはり一九九一年、つまり冷戦が終焉したところで、まず国際的な他者概念が変化しました。

福田…何概念ですか？

レヴェント…他者、いわゆるアザーです。他者概念が変わったということですね。ソ連という概念からどんどんムスリム、イスラーム世界に変わってきた。従って国際社会に愛着心が強かった戦後日本もその影響を受けるというか、このようなこともバックにありまして、決定的にイスラームを

意識したのは二〇〇一年九月一日のアメリカ同時多発テロ事件だと思います。九・一一テロ事件はやはり転換期だったという気はします。纏めて言いますと、九・一一以降、「中東＝イスラーム」という概念は、日本社会で強まってきたかと思うんですけども、この点について福田首相はいかがお考えでしょうか。

福田…僕は、中東といったら石油と、もう直結するんですよ。そういう目で見ていたことはいけなことであるかもしれないけれども、中東というと石油が出るところという認識をしていました。

ですから、そういう意味においては九・一一というのは、革命的な、画期的なことだったと思います。その頃から、イスラームの教えとはいったいどういうことかといった解説なんかも、ずいぶん出てくるということはありまして、日本の国民的に言えば、九・一一で目が覚めたということじゃないでしょうかね。僕は、イスラーム教とかについては、仏教とは違うんだよという認識が前からありました。しかし、ウェイトからいえば七割が石油、三割がイスラーム教、そんな感じじゃないですかね。日本の国民的には一〇〇%、九・一一は「ああそういうことか」ということで理解を始めた。でも、いまだによく分からないという人が、依然として多いと

思っています。

レヴェント…宗教になると、イスラームだけではなくてクリスチャンもそうなのですけど、日本人はちょっと引くような感じがしますけれども。

福田…そうですね。そういう警戒心とかを持ってしまうことはあるかもしれませんね。これは個人差もあると思うけれども、そういうニュースが多いじゃないですか。いまだにISISとか、イラクのああいふ騒動なんか見ているとですね。それからイエメンの問題とか、相変わらずあるわけですね。

レヴェント…それはムスリムの責任でもあると思うんです。

福田…そうですね。それもないとは言えないと思います。なんとかしたいと思いますよ。こういう状況をどのようにに解決したらいいのかね。それは切に思います。

レヴェント…イラン・イスラーム革命についていかが考えておられますでしょうか。

福田…僕は一九五九年から石油の会社に入って、石油を通して中東地域ということを理解するということはありませんね。そのころ石油の場合は、中東というところと油の出るところという理解、非常に分かりやすいでしょう。ですからイランも

当然その中に入るわけです。イスラーム革命はイランで起こった。

日本はサウジアラビアとイラン。イランに非常に依存していて、イランが当時一番多かったんじゃないかな。イラニアンヘビーなどといって、日本で一番使いやすい原油でした。サウジはどちらかというと硫黄分が高くて、ですからあまり歓迎しなかった。

特に日本が自主開発したサウジとクウェートの中間地帯のアラビア石油の石油は、極めてサルファ、硫黄分の多い、われわれが本来に使うのに困る石油でした。僕らはあそこから硫黄分というのは公害のもとということ、既にそのころから日本では硫黄分の少ない石油のほうがありがたいということでした。

それから石油というのは、油種によって軽い部分とガソリン分と、いわゆる燃料だけに使う重油分とか、そういう構成があるのです。そういう構成などを考えた場合でも、イランの原油というのは使いやすいかった。

そのイランで革命が起こってしまったというのは、非常に当時困ったことを覚えております。だから商売でイスラームは理解しているという経験がありますね(笑)。

三 日本の中東政策における要点について

レヴェント…次の質問に移りたいと思います。日本の中東政策において、いまから申し上げる要素をどのように捉えていらっしゃるのですか。まず、資源です。先ほど少しおっしゃったことなのですがもし加えたいことがあればお聞きしたいです。二番は宗教、つまりイスラームです。三番は相互依存性です。四番は安全保障です。

福田…資源の問題、これは順番よく書いてあるじゃないですか。（笑）

レヴェント…（笑）。

福田…やはり中東というのは、日本に対する資源の供給、特に産業の米といわれるエネルギーを中東に依存していた。そして石油があったがために、石炭を使わなくなったという産業的な革命が起こったわけです。固体の石炭というエネルギーから、流動性のある石油というものに変わった。急速に石炭は衰えたのです。言ってみれば、産業革命、エネルギー革命ですよね。

レヴェント…それは日本でいつごろだったのでしょうか？

福田…一九五五年ごろから、実際は一九五〇年ぐらいから石油依存に転換を始めた。日本は石油がないから戦争をしたともいわれるくらい石油は極めて重要なエネルギーであった

わけです。アメリカが日本に対して、石油を供給させないように妨害したということで、アメリカと戦わなければ日本は生きていけないと覚悟して戦争をしたんですよ。石油が戦争の大きな原因だったとも言えるのです。

ですから石油資源を確保するために、中国の沿岸部から内陸部へ侵略し、さらに南のほう、インドネシアとか、ボルネオなどまで行ったわけです。そういう石油に対する思いというのは、非常に強かった。

そして幸いなことに、戦争が終わってから割合と石油の供給が潤沢になったのです。供給過剰とは言わないけれど潤沢になった。それはメジャー石油会社供給をしていたわけです。中東産油国に利権を持つメジャー石油会社が世界中に石油を潤沢に、円滑に供給する、そういう役割を果たしたのです。

戦後のドイツ、日本は、その石油エネルギーを容易に確保できることがあったから発展したのだと思います。日本、西ドイツは敗戦国ですよ。その敗戦国がヨーロッパ、アメリカがびつくりするぐらい発展しちゃった、そのこと自身に非常に脅威も感じたと思います。特にアメリカはね。そういう時代があったのです。

朝鮮戦争が終わったあたりから、経済が順調に発展する段

階になって、一九五五年以降は石油の供給が十分にあつて、日本の産業も石炭から切り替えて、切り替えながらかつ量も増やしていくことができたわけです。日本が復興できた一つの大きな原因が、石油にあつたということです。

レヴェント…先も少し話されたかと思いますが、イスラーム、宗教については加えられたいことがもしあれば教えて頂きたいです。

福田…中東地域は、石油資源の供給国であるという理解はみんながしていたわけで、特にわれわれ石油関係者はね。しかし、当時アラビア石油、一九五五年ぐらいからサウジアラビアと交渉を始めたんじゃないのかな。山下太郎ですね。その交渉に当たっては、イスラーム国相手の交渉。普通のやり方では駄目で、まずイスラームを理解しなければいけないということで、そのために非常に苦勞をしたと思います。話が細くなるかもしれないけれども、交渉するときに林さんという人がいてね。

レヴェント…林昂ですか。

福田…林昂といったかな。

レヴェント…サウジアラビアに長く滞在したアラブ石油会社の関係者ですね。

福田…そう、そう。あの人がいたからうまくいったんです

よ。

レヴェント…この人は質問の中の一歩最後にあるのです。

答えて頂ければありがたいですね。

福田…そうですね。あの人はアラビア石油の中でそんなに偉くなかった。しかし、あの人は交渉のために、自分自身イスラームに改宗したんだよね。

レヴェント…ムスリムになったのですか。

福田…そうですね。そのことによって国王、また一族の方々に非常に信頼を得た。おそらくアジアから来てイスラームに改宗してくれたことについて、評価をしてくれたのだろうと思います。非常に信頼された。当時日本から送った大使が駐在しています。このサウジアラビア大使はあまり役に立たなかった。なにか大事なことがあれば、全部林さんに相談をする。

レヴェント…どちらかというと、「民間の外交官」ということでしょうか。

福田…そう、「民間の外交官」ですね。もうそのぐらいの力を持っていたということです。国王に会いたいのだったら、大使には相談しない。そういう時代があつたのです。彼のおかげでアラビア石油は成功した。しかし、もったいなかったけれども、権益の改定に失敗してしまった。残念だった

です。

私がイスラームのことについて理解を深めたのは、一九九〇年に湾岸戦争がありました、あのときですね。国会議員になりたてに湾岸戦争が起こったのです。日本はいったい何をすることが出来るかという。それとあとの質問にあるでしょう。そういうようなことがあったのだけでも。

あのときにイスラエルのエルサレムに行きまして、あそこに行つてなるほど中東の政治は複雑なものだなと肌身で感ずることができた。もちろんその前にも関心を持って、たとえば、井筒俊彦さんの本などを見ており、頭の中の理解は多少あった。しかしあの地域に行つて初めて、複雑性というか、非常に難しい問題があると、歴史的にいつても、宗教的にも難しい問題があるということをよく理解しました。

そのあとは例の九・一一ですね。そういうことで段階を追つて理解も深まつていった。深まつたといつても、たいしたことはいけどね。

レヴェント…次は相互依存性についてです。

福田…相互依存性。相互依存というのは、中東地域とアジアとかそういう意味においてですか。

レヴェント…そうですね。

福田…それはもう極めて重要な地域であることは、肌身で

感じておりましたから、そういう国々との関係を強化したいという気持ちはずっと持っていたのです。

レヴェント…最後に安全保障という点については。

福田…石油の供給という意味においての安全保障ということとあります。日本は中東石油にほとんど依存をしていると。中国も依存していますが、中国の中東への依存度は低いですよ。アフリカから相当量を輸入しているから。中国は、中東とアフリカとほとんど同じぐらいではないですかね。

どちらが賢いかといつたら、それは分からない。目先、短期的に考えれば中東から輸入するほうは便利で、ビジネスも慣れているし、安心してということはありません。ところが、あまりにも中東に依存しすぎると、これはあの地域になにかあったら大変だという失敗、その失敗は例の湾岸戦争ですよ。ね。

ですから、そのへんはバランスよく考えていくということはある。しかし、中東地域の安定については、われわれは非常に心配し、安定してほしいと。そのほうがアラブの国民にとつても、はるかに利益が多いだろうと感じますよね。ですから、そういうことのために協力できる場所がないのかということとは、常々考えています。

四 戦後日本のアジア外交と中東

レヴェント…次は、戦後のアジア外交と中東ですが、一九五五年のバンドン会議前後から、エジプト、中国、インドといったアジア、アフリカ諸国が、冷戦期の二極構造の国際政治上の第三勢力として浮上しました。脱植民地主義的なこうした動きに対する日本のスタンス、政策についていかがお考えでしょうか。

福田…歴史的にも、そういう流れの中でこの会議が開かれたと思います。しかし、こういう今まで植民地化されていた地域が、それぞれ独立を果たしていくということについて、日本がその先鞭をつけたようなことは言われますが、でも、その結果、戦争をしてしまったのは、明らかに日本の失敗であると思います。

ですから流れはよく理解します。また、そういう方向にくるのは必然であるし、必然であるならば、日本はそういう方向の動きには協力をしたいと思う。しかし、協力しすぎると内政干渉になりますから、これは注意しなければいけないと思います。

レヴェント…次に、戦後日本外交の中で中東というのは、どういう場所を占めていたでしょうか。これは先ほども触れられたと思うのですが、やはりアジア外交の中で、エネルギー

ギー資源というファクターにこだわって捉えるべきでしょうか。

それとも特にイラン革命、一九七九年までの現地の政情に連動するような資源を越えた民族イデオロギー的な側面もあったと思えますか。たとえば、同じアジア民族という意識などがありましたでしょうか。

福田…たとえばアメリカにしても、特にイギリス、ヨーロッパの国々は中東地域に政治的に介入していたわけですね。日本は、それは一切していません。だからそういう意味において、とっかかりがないということはあるのです。われわれの願うことは中東地域が自分自身で安定してほしいなと。

しかし、なにか手伝う要素があるのであれば、それはわれわれとしてできることはやっていきたいと思っています。いまでもそういう意味で、こういう混乱の時期においてなにをなすべきかについて、はっきりした解答はないけれども、個々に人材育成などの面において日本らしいことができないかということは考えています。そういうチャンス、提案があれば、それは真剣に考えていきたいと思っています。

それからもう一つは産業、今は脱石油の時代になっ

力は、大事なことだと思います。また、人材育成であれば、たとえばサウジアラビアのジェットダで自動車の修理工を育てる学校をつくって、これはJICAがやっていますが、一〇何年ぐらい前から始めています。

これは地味な仕事ですが、非常に役に立っていますよ。だって中東は自動車がないと動けない、身動きできない、公共交通機関がありませんからね。ですから、そういう自動車に對して、故障してもすぐに直せるようなメカニックをたくさんつくっていくことはどうしても必要です。そういう訓練学校をつくりました。これは毎年一〇〇人、もしくはそれ以上の単位で卒業生を出していると思います。これは日本らしい協力だと思っています。

レヴェント…現実主義的な福田首相から見て、中谷武世のような大アジア主義イデオロギーを代表する「アラブ通」や戦前からの「大アジア主義」をどう評価しておられますでしょうか。

福田…それは同じ名前だけれど、中身は全く違う。主義が違うと思います。日本を中心として、日本がアジア全体をまとめていこうと。時には占領もしよう、植民地にしようという魂胆じゃないですか。

レヴェント…戦前ですね。

福田…戦前は。戦後はそうじゃないです。そういう考え方をしている人は、おそらくいないでしょう。中谷さんにしても、そういう反省から逆にアジア全体に目を配りながら、みんなと仲良くやっていきたい。それは日本にいてそういうことをやっていこうと。昔は向こうにもどこにも自分たちが行っちゃおう。そういうことだね。

レヴェント…行くというのは進出するということでしょうか。

福田…そういうことです。侵略も含めてね。

レヴェント…戦後はどちらかというと、お互いに協力、相互協力ということですね。

福田…そうそう。仲良くしていこう。みんなで仲良くしていこう、そういう考え方ですね。根本的に違います。名前は同じとしてもね。アジア主義というのは、今はあまりはやらないよね。日本がアジア主義になった時、中国は何て言う？中国の人は「アジア主義というのはいったい何ですか」。自分たちが中心のアジア主義。存在しないです。もつとグローバルですよ。自由経済、グローバル、そういうことじゃないですかね。

レヴェント…中身が中谷と異なるものの、戦後の田中清玄も「アジア連盟」というアジア地域主義を唱えたことがあり

ます。田中のアジア連盟構想は、具体的にはどのようなものかと言いますと、日本・中国・インドネシアが一つとなることです。

なぜインドネシアを入れたかという点、アジア地域だとムスリムがいっぱい在留しているし、彼らを引っ張っていくのにインドネシアのようにイスラームの大国が必要だというのが、彼の発想です。

福田…田中さんはインドネシアに関して人口も多いし、そして資源もあるということじゃないの。そういうことだと思います。

五 湾岸危機について

レヴェント…湾岸危機ですが、アメリカをはじめとする国際社会は、湾岸戦争中日本が自衛隊の派遣をしてくれるという期待を持っていたと思いますが、最終的に日本政府はそれに応えず、資金協力にとどめて対応していました。こういった事実も含めて、湾岸危機についてお話しただけですでしょうか。

福田…日本の国是という点、憲法で戦争はしないということとを明記しているわけです。ですから憲法に抵触することはない。ですから戦争中は、戦争に関係のない分野で協力で

きる分野があれば喜んで協力するけれども、そういうチャンスはなかなかないのです。

しかし、戦争が終わればいくらでも協力したいと、自衛隊も派遣しようということ、掃海艇を派遣しました。あのときは五〇〇人派遣したのです。私も現地に行つて自衛隊員を激励もしましたけれども。ですから、これは戦争が終わったあとです。掃海艇というのは、機雷を除去するわけです。ほかの国もそれをやっていますが、ほかの国がやり残した難しい地域とか、そういうところの掃海作業は、おそらく相当な評価を得たと思います。

戦争中はしませんでした。だからそのことについて、批判もありました。でも相当なお金を出していることもありますから、結構やっているのではないかと思います。総合的にいえば、ずいぶん協力をした国の一つだと思っています。一番とは言わないけれどもね。

レヴェント…自衛隊の激励というのは具体的にはどんなことだったでしょうか。

福田…僕は国会議員になってまだ一年しかたっていなかったのです。アブダビに行くというタイミングがたまたまあったわけです。アブダビに行つて国王などに会いました。今の皇太子は外務大臣でしたか、彼とも会いました。そういう

時、たまたま掃海艇が入ってくるといういいタイミングだったわけです。じゃ激励に行こうというので、どういう激励かと言えば、隊員などは港について少し羽を伸ばしたいというわけで、みんな上陸してしまっただけで、艦長だとか偉い人などは残っていて、彼らと少し話をするとか、激励をするというのはそういう意味です。

それから隊員にあの時はまんじゅうを持っていた。でも五〇〇人だからすごいんだよ。一人二個だって一〇〇〇個でしょう。

レヴェント…結構な数ですね。

福田…結構な数を持っていたんです。それから週刊誌とか何百冊持っていた。

レヴェント…福田先生は一人で激励するということですか。

福田…議員を連れていった。

レヴェント…議員グループということですね。

福田…三人で行ったんだだけだね。

レヴェント…みんな自民党の議員でしたか。

福田…自民党の議員。びっくりしたのは運賃が高い。まんじゅうと雑誌を持っていた、それが運賃だけで二〇〇万ぐらいかかったかな。オーバークエート（笑）。そういう思い

出があります。

レヴェント…隊員も喜んでいらつしゃったんでしょうね。

福田…そう思うけど。三カ月ぐらいかかって行っただけだから。

六 福田赳夫と中東

レヴェント…次の課題に移りたいと思うのですが、お父様の福田赳夫様と中東というタイトルで、第一問です。歴代首相の中で初めて、福田赳夫元総理は中東の訪問をされました。一九七八年九月五日から一二日までの中東訪問において、イラン、カタール、アラブ首長国連邦、サウジアラビアの首脳と会談をされています。福田康夫先生は、お父様のこの訪問に秘書として参加されたかと思いますが。

福田…私は行っていません。

レヴェント…行かれていないのですか。

福田…そのとき行かなかった。行かなかったけれども、計画をつくるのに参画したことはあります。私の父は経済をやっていましたから、経済というのは非常に重要であると重視しておりました。当時は、まだ日本の二次産業製造業は非常にウエイトが高かったです。その中において、エネルギーというのは極めて重要な資源であるということで、そういう産

油国との関係を重視することは、非常に気を使っております。

だから、先ほどあなたの質問にもあったように、そういう国々とういう相互協力関係をつくることができるかを考えていたわけです。

レヴェント…次に、お父様の福田赳夫元総理とアラブ協会創立者である元改進黨議員の中谷武世との関係について、ご存じのことがあれば伺いたいと思います。

福田…彼は、よく自宅などに来ていました。事務所にも杖をついてよく来ていた。中谷氏が、割合と信用してくれたのではないでしようか。ですからいろいろな中東に関する情報は、中谷氏からずいぶん聞いていたということです。

レヴェント…『民族と政治』という。

福田…雑誌だ。

レヴェント…そうです。『民族と政治』という雑誌を彼が担当で作っていたかと思うのですが、私は去年の八月から一〇月の間で一生懸命読んだら、お父様の福田赳夫様との写真がちよくちよく出てきて、仲がいいねという気がしました。

福田…仲がよかったです。仲がいいというか、お互いに意見を交換する価値があると考えていたのではないでしようか。福田赳夫も中東のことをそれほどよく知っているわけ

はないですからね。ですから、中谷武世が見てきた、また話してきたことを、その時々聞くということとはよくしていたのです。そういうものに対しては、関心を強く持つておったということですね。

また、中谷氏はアラブ協会を創設したとか、そういう功績もありますしね。当時、非常に少ないパイプ役であったことは言えるのではないでしようか。当時、中東地域でほかにそういうお付き合いをする人がいない中で、彼は日本人として一生懸命その重要性を感じながら付き合っていたということ、中谷氏はそれなりの見識を持った人だと思っています。

レヴェント…引き続き、福田赳夫先生に関する質問ですが、福田康夫先生は政界に入る前にお父様の福田赳夫様の下一四年間も秘書をされた経験があります。秘書官として接した福田赳夫先生、言い換えれば福田康夫先生から見た福田赳夫像について伺いたいのです。まずどのような政治家でしたか。

その次は、福田赳夫様の中東観についても教えていただきたいです。

福田…政治経歴が長いですよ。またいろいろな役職をしています。大臣もたくさんやっていますしね。大臣の在職期間も長かったし、大臣でなければ自民党の幹事長をする

か、要職を休む間もなく連続してやってきたわけですからね。

そういう中でイスラームの国々とのお付き合いというのは、当然あります。また、そういう政策決定をずっとしてきましたから、イスラームの国々の政治家とか、また主要な人たちが、よく相談に来る、また頼みに来るということはたくさんありました。ですから割合とお付き合いした人は多いのではないかと思います。

レヴェント…特に仲がよかったリーダーとは。

福田…トップリーダーですか。

レヴェント…はい、そうです。

福田…たとえば、アラブ、アブダビの国王のザーイドさんですね。彼などは、中谷武世さんが向こうで話をするのがあったのだろーと思えますよ。会ったら非常に親しく、お互いに旧知の間柄のような話し合いをします。ザーイドさんも福田赳夫といったら、なんといっても大事にしてくれる、そういうことはありましたよね。

レヴェント…話が少し変わりますが、アブダビ国王のザーイドと田中清玄との関係について御存じのことがあれば教えてください。

福田…田中清玄さんは、ジャパン石油開発をつくるとき

に、権利をザーイドさんの了解を得てもらったということはありませんでしたね。そのことでしよう。ただ田中清玄さんはそのときだけですね。長い付き合いをずっとしていたというわけではないと思います。ちょうど石油危機のときで、どうしても日本が必要だというときに田中さんが一生懸命動いて、そしてザーイドさんと最後話をしたと。

B P（レヴェント註：British Petroleum）の持っていた権利をものすごく高い値段で買いました。だから一番喜んだのはB Pですよ。ザーイドさんじゃないよね。しかしそれを日本が買うことについて、ザーイドさんの了解を得なければいけませんから、そういう意味で折衝はしたかもしれないけれども。田中清玄さんが交渉したのはB Pですよ。

レヴェント…どちらかというといギリスとの関係が強かったとの理解で宜しいでしょうか。

福田…そうです。権利をB Pがどこに売るか。あのときはなにしろばか高い値段で買ったのです。それは、B Pは大喜びですよ。

レヴェント…どちらかというとい田中清玄が日本よりも、B Pを喜ばすような役割を果たしたと言っているのですか。

福田…そうです。そう思います。

レヴェント…分かりました。戻りまして、お父様の福田赳

夫様の中東観について教えて頂きたいです。

福田…中東観。インドネシアの人とよく付き合っていました。これは当然のことかもしれないけれども、そういう意味でイスラームというものに対する理解と感覚は、十分持っていたと思います。インドネシアとの場合は、インドネシアの経済を応援するという立場です。インドネシアは石油があるからということだけではない、その見返りとして日本から便益を供与するような、そういう形だったと思います。

中東の場合には、石油を向こうからもらうような、そのためにお願いするみたいな感じだけでも、インドネシアは必ずしもそういうわけじゃなかったと思います。アジアの中核的な国として経済をしつかりさせなければいけない、そのために協力をしようという感じですね。

レヴェント…そういった国々に経済的に協力することによって、日本の利益はどこにありますか。

福田…当然あります。当時は中国も経済的には、まだまだ小さな国だったのです。ASEANももちろん小さいですよ。でも、いずれはこの国々が成長していかなければいけないだろうと。成長するであろうと期待もしておりましたから、そういう国々が成長したら、国々との関係を強化することによって、たとえば経済面においてもお互いに利益するこ

とが多いのではないかと考えています。

戦前はそこに軍事力を投入したわけですから。そうではない形でお互いに利益しようという、どちらかといえば日本は向こうが育つまでは協力しよう、こちらからはギブしよう、ギブアンドギブでいこうというぐらゐの考え方をしておったです。だからそのころから、アジア地域に対してはODA（政府開発援助）なども、非常に供与を増やしていきました。

七 福田康夫と「中東」との出会い

レヴェント…次は福田康夫先生について伺いたいのですが、先生が中東と最初に出会ったのはいつでしょうか。どのような出来事がきっかけだったのでしょうか。

福田…これは石油がこれから場合によっては不足するかもしれないという第四次中東戦争の前ですか、一九七二年のころに。

レヴェント…まだ第一次オイルショックは起きていないのですね。

福田…起きる寸前です。そのころ石油が出る国を調査に行ったのです。会社から派遣されて、ほかの会社なども代表を出して、全部で七人だったかな、調査に行ったのです。そのときイランにも、サウジにも行きました。アブダビにも行き

ました。石油が出るところは世界中、ベネズエラにも行きました。そういうことをしたことがあります。それが最初の出会いです。

当時、イランのバーレビ国王に面会を申し込んだのだけれども、残念ながら会ってくれなかった。でも、申し込んだ人はほとんどみんな会ってくれましたね。最後はニューヨークに行つて、エッソ、つまりエクソンという名前を変える前の段階のロックフェラーのニュー・ジャージー・スタンダード石油会社にも行きましたね。

そして一九七二年というのは、なにが中東地域であつたかというところ、パーティシペーション、当時経営参加と訳しておりましたけれども。今まで中東の石油は、メジャーが支配していた。メジャーがほとんど全部利権を持っていたのです。王様の取り分は数パーセントで、あとの九〇何パーセントは全部メジャー・オイルカンパニー、当時セブンシスターズと言われていたが、石油の採油から消費国の末端消費者まですべてを支配していた。

そういう経営権を産油国が取っちゃおうという動きがあつたのです。石油は、非常に需要もあるし、日本、西ドイツ以外にも順調に需要が伸びていく状況の中で、もつと経営権を持つていこうと。ちょうどOPECが強化されたころです。

OPECが相談してもつと経営参加しようと、自分たちが取ろうというようなことがありました。

そしてメジャー・オイルの国々も会社も、それは抵抗できないと。むしろ逆に、そういうふうにしたほうがいいんじゃないかと考えた会社もあつたのかもしれないけれども。というのは、中東地域というのは、政情、政治的に不安がある、安定度がどうも不透明であるといったこともあつたと思います。

当時は原子力発電というのがだんだん出てきて、メジャー・オイルの人たちもいずれ石油から原子力に変わるんじゃないかぐらいに考えた会社もあつたんじゃないかと。非常に複雑な状況がありました。

そういう中で、イランのような革命が起こるということがありましたから、そういうところはパーティシペーションの動きが急速に進展して、国王がそれを支配する体制になつたわけです。そういう意味においては、そのときから国王に対してもつと接近しなければいけないという動きも、当然ながら出てきたわけです。それまでと全く違う状況になつてきた。そういう中でオイルショックというのは起こつたわけですよ。

レヴェント…石油危機時にソ連にも同国の輸出公社との原

油価格交渉の為に行っておられますかと存じますが、その訪問について具体的に教えて頂けますでしょうか。まずこの訪問は一九七二年に中東に訪問した時についてソ連にいらっしやったということでしょうか。それとも一九七三年に第四次中東戦争が勃発してからでしょうか。

福田…そのあとも含めて何度も行っている。

レヴェント…ベネズエラやアメリカなどはわかりますが、ソ連というのは意外ですね。

福田…ソ連は日本海、ウラジオストックなどから石油を輸出することがあったんです。それから硫黄分の少ない非常にいい原油を持っていたので、それを買うためにね。

レヴェント…ソ連から石油を買うのは、一九七三年の石油ショック以降ですか。

福田…その前からです。別に増やすとかはしませんでした。というのも、向こうもそういう特殊なものは生産量が限られているから。

レヴェント…日本の中東資源外交に関しては、基本的に日本が一九七二年までメジャーを相手にしていて、それ以降はメジャーだけでは駄目なので、国王や中東諸国の首脳部と直接に接触していかなければいけないという理解が強まってきたという解釈でよろしいですか。

福田…それを境にして、明らかに切り替わったわけです。それまではメジャー・オイル・カンパニーを相手にすればよかったです。メジャー・オイル・カンパニーは、日本まで売りに来るわけです。日本にいて、座っていて買えたわけです。契約ができたわけです。そういう時代が終わったわけです。むしろ産油国に直接交渉しに行く時代が始まったわけです。当然ながら、そういう国々ともっと密接な関係を持たなければいけないことになりましたから、一〇〇パーセント状況が変わったということです。

レヴェント…次の質問ですが、福田総理は早稲田大学を卒業されたあと、丸善石油に入社し、約一七年間同社にお勤めになりました。丸善石油時代の福田先生について詳細にお話しただければと思います。まずは、なぜ石油会社に勤務しようと思っていच्छやったのですか。

福田…これは、私が大学生時代から、アメリカ式の会社運営に関心を持ち、いずれは金もうけをしようと考えていたわけです。当時、そういうことを考えたときには、企業で仕事をすることですけれども、そのぐらいにまだ日本が貧しい時代だったんですね。学生の頃は、僕は経営学などをずいぶん勉強しました。それで、卒業する頃には、普通の会社じゃつまらない、これから伸びる会社。ということとは、

当時、何といってもエネルギーは、石炭から転換して石油エネルギーが注目されていた頃ですよ。同時に、石油化学原料としての石油が着目されていた頃で、いまこれから需要が伸びる分野で仕事をするのが一番いいだろうと考えたのです。

それで、石油会社の中で、ほかにもありましたけれども、当時、一番活発に積極的な経営をしている会社が丸善石油だったのです。ですから、丸善石油が一番いいだろうと思って、そこに入ることを決めました。後年、アブダビ石油を開発した杉本茂はなかなかアイデアマンだったんですよ。人間的にも大変立派な人でした。その人は普通の仕事をしない、新しいものを発想する能力を持っていた人なんです。彼が書いた本なんかも見ていまして、「ああ、こういう会社はいいだろう」と思って、丸善石油に入ったのです。

レヴェント…その当時から杉本茂との面識があったんですか？

福田…面識はなかったです。その本を通してしかなかったんです。本の中に書いてあったことは何かといったら、当時は石油を日本が外国から買うのが当たり前でしょ。しかし、その石油をアメリカに売ることを考えた人なんです。どういうことかという、日本は当時、自動車のガソリンは需要が少なかったんです。だから、そういうガソリン分が余るん

ですよ。それをアメリカに輸出した。当時、アメリカはもうモーターカー時代ですからね。ガソリンが不足するという状況の中で、ガソリン成分を、逆にアメリカに輸出したんです。そういう発想をする人だったんですよ。

当時、日本がアメリカに石油を輸出するなど考えられなかった。石油は全部外国からくるもの、くる一方だと考えていた。原油をタンカーに積んで日本にくる。そうすると、帰る時にタンカーは空っぽになるでしょう。その空っぽのところにナフサを積んだんです。ナフサとかガソリン成分をね。だから運賃が安くなるわけです。向こうも安いナフサを入手できる。

ちょっと考えれば当たり前の話だけれど、当時はそういうことを考える人は誰もいなかった。

だから、そういう本も出していましたし、面白いなど。こういうことを積極的に考える人はいいんじゃないかと。

レヴェント…それで、そういう人がいる会社に行きたいという。

福田…そう、そうなんです。

レヴェント…既に少し触れたかと存じますが、丸善石油ではどのような仕事をされたのでしょうか。またそのご経験はあとで政治に関わられてから、どのような形で生かされたで

しょうか。特に中東との関係において、なにか影響がありましたでしょうか。

福田…ありましたね。入ったところは、石油はメジャーが扱っていた。そして比較的容易に入手することができた。メジャーも一生懸命売り込んでいたわけですね。それで、その楽なころは、私は計画的な仕事、会社の経営計画といったような計画分野の仕事をしていました。

石油ショックが起こる前に、偶然だろうと思いますが、石油の調達部門に変わったわけですね。石油の調達をしなければいけないということですから、仕事の内容ががらりと変わってわけですね。ですから、調達の多様化、いろいろな国から調達しようということも考えて、ずいぶん国を増やしたということもありました。

レヴェント…石油調達部門で具体的にどんな仕事されたのでしょうか。もう少し詳しく教えて頂けますでしょうか。

福田…石油の輸入そのものです。輸入実務というか、輸入を契約することが一番大きな仕事でした。

レヴェント…そうしたら、中東だけではなくベネズエラあたりもあったかと思うんですけども、産油国との直接な交渉なども行ったという例などがございましたでしょうか。

福田…当時は、相手は産油国じゃないんです。メジャーな

んです。ほとんどがメジャー・オイルです。当時はまだ、直接的な産油国との交渉は、ほとんどなかったんです。ちょうど石油危機が起こったときに、パティシペーション（経営参加）が、という動きが同時並行的に起こって、要するにOPECの団結が、力を持てしまったわけですね。そしてパティシペーションに。要するに、メジャーから取り戻すんだと。そうしたらば、いままで産油国と交渉したことのない、経験のない国々が、みんな慌てて押しかけたわけですよ。そして、石油の値段を押し上げてしまったという。それが石油危機のときの混乱の要因の一つですね。

レヴェント…先ほど福田先生は一九七二年に初めて中東に行ったと仰ったが、丁度このときですね。

福田…そう、そうです。ちょうど石油の調達部門にいたころです。また、パティシペーションが行われる寸前ですね。そのときは調査団で行ったのです。エネルギー調査団というのがありまして、それに参加して行ったんです。

八 政治家への転身

レヴェント…次に移っていただいて宜しいですか、つまり丸善石油でのご経験はあとで政治に関わられてから、どのような形で生かされたということです。特に中東との関係にお

いて、なにか影響がありましたでしょうか。

福田…そういう石油ショック、そして外国、産油国との関係を考えていくと、政治というのは非常に重要な要素を占めるようになったということは実感しました。ですから、特に外交は極めて重要であることは意識しておりました。ですから私が国会議員になって、外交を一番最初に手がけた一つの理由でもあります。そういう背景があったわけです。

またそういう基礎的な知識は十分に持っていましたから、政治家になってからも非常に役立ったと思います。

レヴェント…ここでおっしゃった外交は伝統的な外交ですか、パブリック・ディプロマシー的な外交ですか。

福田…そこで考えたことは伝統的な外交です。しかしその伝統的な外交の基礎はなにかといえば、パブリック・ディプロマシーが基礎になっていると。やはり国民同士の理解が、外交を進める上で極めて重要である。外交がうまくいくかどうか、国民同士がお互いをよく理解しているかどうか、国民同士がお互いを認め合う関係になれば、オフィシャルなディプロマシーも進めやすいです。

もしそうでないと、ディプロマシーというのはうまくいかないですよ。国民が反対して外交がうまくいくことにはなかなかならない。もしなかったとしても困難を伴うということ

です。ですからパブリック・ディプロマシーというのは幅が広いけれども、とても大事な要素だと思っています。

レヴェント…次に移ります。

福田…ちよつとそこで追加したいことがあります。

レヴェント…はい、どうぞ。

福田…日本は戦後、実際問題やってきたことは、パブリック・ディプロマシーですよ。それが中心的な課題だったと思います。ほかの国と同じような、たとえば軍勢力とか、そういう要素がないんですから、ほかの国とは全く違う状況にある。軍勢力を意識しない外交となりますと、やはり人的交流とか人材育成とか、産業を育成するとか、そういった形になりますね。これは外務省だけでできることではないです。そうですね。

レヴェント…そこは、少し進んでから詳しく教えていただくのですけれども。次にうかがいたいのは、一九五九年から一九七六年の間、丸善に勤務されたのですね。

福田…そうですね。そんなものです。

レヴェント…何がきっかけで、丸善石油を辞めて、政界というか、お父さまの福田赳夫の下で秘書役をすることを決めておられましたでしょうか。

福田…そもそも産業政策の中の石油の位置づけ、会社の在

り方も含めて、もう限界を感じていましたから、それが一つありました。その前には、いろいろ開発会社などに「参加しないか」という話もあったのです。しかし、同じ石油の業界の中でそういうことをすることについて若干抵抗があったし、たまたま政治のほうに足を突っ込んでいく機会が増えました。私が丸善にいた最後の頃は、政治の仕事に相当関与していました。それで、父親が総理大臣になったときに、それを補佐する立場の人が必要だと感じて、それで仕事を変えなりました。

レヴェント…そこからもうずっと政界で活躍されたのでしょうか。

福田…そうですね。それから、当時は中選挙区制というのがあったんですよ。これはなかなか選挙が大変なんです。選挙運動が大変なんです。選挙運動とは、選挙が始まってからの話じゃないんですよ。もう要するに三六五日、ずっと選挙なんです。ということは、年がら年中選挙運動です。中選挙区制の弊害の一番大きなところはそこにあるんですよ。

レヴェント…そうしたら、人の力も必要になってくるでしょう。

福田…そうですね。

レヴェント…スタッフは多ければ多いほど良いでしょう。

福田…スタッフもたくさん要るけれども、同時にそれをもめていく人が必要だったわけですね。中選挙区制で、選挙区に事務所がありますね。そこを中心いろんな活動をするわけです。そして、中選挙区制のときは、やはり後援会の組織があったんですね。いまでもありますけれども、いまのとはもう比較にならないくらいしっかりした組織がありまして、その組織を運営していかなければいけない。

レヴェント…いまより当時の選挙争いは激しかったということですね。

福田…そうですね。私の父の選挙区は、福田、中曽根、小淵、それに社会党は委員長をやった山口という、この四人です。毎回これで争っているわけですよ。大変なんです。

レヴェント…みんな強い候補者ですね。

福田…そうやって後援会組織をつくつてくると、福田と中曽根はいつものすごく熾烈な戦いをした。どっちが一番になるか。後援会同士とすると、やはり自分のほうが勝たないといけないですよ。もう必死の戦いをするわけですね。

レヴェント…大変ですね。

福田…それは大変ですよ。それが中選挙区制。こんな選挙制度はよくないというのは、福田赳夫はずっと主張していた。同じ考えを持っていたのは、岸信介。

レヴェント…そういうシステムはいつ頃から変わったんですか。やはり冷戦が終わってからなんですか。

福田…うん？

レヴェント…変わったのは冷戦終焉後、つまり一九九〇年代に入ってからなんです。

福田…一九九七年の選挙で第一回目の小選挙区制に変わりました。

レヴェント…一九九〇年代ですか。

福田…そう。一九九〇年代の終わりの頃にリクルート事件が起こって、それが他の不祥事と重なって選挙制度の変更ということになり、一九九四年に今の小選挙区制になりました。

一九五五年以来自民党がずっと勝っているのは、野党が弱いからです。これはもうまったく日本独特の政治の話になってしまう（笑）。そういうことはありまして、中選挙区制が小選挙区制になった一番大きな原因は、自民党の中における戦いが激しすぎる。その戦いのテーマは政策じゃない。政策は同じですから。自民党の中同士ですから。あと、サービス合戦だったということね。

結果的には金がかかるということですよ。金がかかるのをいとわずやったということです。そしてまた、そのお金も

調達できた。企業はコンプライアンス意識がなかった。ですから企業の闇の献金もあったし、それから政治資金規正法、受け取る側の規制もそれほどなかったし、非常にルーズな時代。おそらくアジアとかでは、そういうことはいまでも行われているんじゃないかと思います。

レヴェント…さっきの話の中で、丸善にいらっしゃった最後の頃、政界にもちよつと入ったかのような仕事をやっていたというのは、会社的な仕事でなさったのですか。

福田 いや、そうじゃありません。一切別。一切、切り離してね。仕事には影響しないように気を付けました。

九 石油危機について

レヴェント…次ですが、いきなり話が変わりまして申し訳ございませんが、戦後中東認識、政策を理解する上で、一九七三年に起こった石油危機が大きな転換期だったと思います。石油危機の際、福田総理は丸善石油に勤務中だったかと思いますが、当事者としての同危機について、少し伺いたいです。先ほども若干触れたかと思いますが、丸善での個人的な経験や、同じ会社の中で、政財界の人との付き合いの上でもし追加でおっしゃりたいことがあればお聞きしたいです。また、同危機が日本社会や政治、経済界に与えた影

響とはなんだったのでしょうか。認識と政策レベルを軸に教えていただければと思います。

福田…難しいですね。ちよつと幅が広いから、ちよつと答えにくいけれども。一九七三年というのはまさに転換期ですよ。これは同時に、中東の産油国自身の転換期でもあったわけです。それからメジャー・オイル・カンパニー、そういうものが、一歩も二歩も三歩も後退したわけです。ですから世界が変わった時期だと思えます。それが日本の社会や政治、経済にどういう影響を与えたか。いままでの発想、考え方は、根本的に変えなければいけないということだったのではないかね。

国民的にいえば、石油がなくて、トイレットペーパーがないということが一番分かりやすいことです。そういうことによって、石油がいかにわれわれの生活に浸透していたかに気が付いたということではないでしょうか。

石油は日本の産業だけではなくて、日本の経済全般に深く染み渡ったというのは、否定できないことでしたよね。あまりにも深く入りすぎてしまったことに対する反省も、当然あったわけです。そこから出てきたのは、省エネルギーという概念、これが非常に大きかったのではないのでしょうか。

これは日本だけの話ではないのですが、たとえば小型車が

そのころから急速に増えていったということです。おかげで小型車をつくっていた日本は、非常に経済的には利益したこともありましたけれども。反面アメリカのように大型車をつくっていたところは、自動車産業は非常に斜陽化していった。あのころは転機ですよ。そういう世界の経済に与えた影響は極めて大きい。しかし、もとを正せば各個人がそのことを意識し始めた、そういう時期だと思います。

もう一つ追加していえば、当時ローマクラブの提言というものがありました。それは石油ショックの二三年前です。その考え方、ローマクラブの提言は、一言で言えば、人口がどんどん増える、資源をどんどん使う、そんなことを続けていたら地球が破滅するという提言です。そういう提言と石油ショックはちょうど重なるのです。文明的にも非常に重要な要素であったと。そのへんはあなたもよく研究したらいいと思いますよ。

レヴェント…なにか関係があるかもしれませんということでしょうか。

福田…ありますよ。大いにあります。そしてまたメジャー・オイル・カンパニーがそういうことを意識して、パーティー・セッション（レヴェント註…経営参加）を受け入れる考え方になった一つの大きな原因ではないかと思っています。

そのへんのことは非常に大きな産業社会経済、そして国民生活に影響を与えたテーマだと思います。それからもう一つは公害問題、環境問題に対する意識がそのころから強くなってきたと思います。

一〇 福田康夫首相と「中東」

レヴェント…内閣総理大臣に就かれたとき、中東諸国とどのような付き合いをされたでしょうか。政策上のプライオリティーは何だったでしょうか。

福田…幸いにして私が総理大臣をしているころは、特別な問題はなかった。その一年間では、中東関係はあまりなかったですね。イスラエルが、わりあい積極的に情報提供してくれたということがありましたけれどもね。中東の石油についてはあまり大きな問題がなかったのです。しかし、リーマン・ショックというものがありません。

中東関係で一般的に言うところ、あの頃は平穏な時代でした。幸いなことに、外的に大きな事件とはなかった時代だったと思います。むしろあの頃は、環境問題ですよ。国際的な大きなテーマになって、環境問題という脱石油ですよ。だからその頃も、やはり石油からだんだん離れていくことと同時に、中東諸国もだんだんと。いままで自噴していた。力があ

った。それが、油田が皆年を取って、たとえば水を注入するとか、ガスを注入するとかで出すところも出て、老齢化してきたということもありますよ。新しい石油開発、たとえば穴を掘ることを、少しやらなくなってきた時期でもあるんじゃないかと思います。

ですからリーマン・ショックのようなことが起こった。これは、ガソリン価格がどんどん上がってしまったわけです。当時石油価格が一七〇ドルとか八〇ドルとか、値段が高くなつたんですね。あれはアメリカの金融経済の破綻ではあるのだけれども、それだけではなくて民主主義国家が少し異常な状況を示した時期ではないかと思っています。

あのときはアメリカがガスの開発を始めた。みんなが始めてしまったわけです。なにしろ石油価格がどんどん上がっていったのですからね。ということは、石油の生産がそれに追いつかなかったということですから、やはり開発の限界があったんじゃないですかね。ということは、産油国も、そんなにほうぼう掘ってたくさん出しているものが売れなくなつたら、値段が下がるだけでしょう。石油は備蓄が利かないんですよ。備蓄は量が限られている。ですから、需要がどんなないと、生産もできない。すぐあふれてしまう。あふれると大変だから。石油はいったん掘って、出だすと止まらない

んですよ。止めるときは、その油田を一時的に閉鎖するといったようなことで、お金もかかるしね。結局あふれてしまう。そうしたら安売りしよう。すぐそういうことになるんです。安売りすると、原油価格が下がるでしょ。OPECはそういうことをしたくないという気持ちが強く、そのためにOPECをつくったようなもので、OPECは生産調整機構です。価格を維持するための機構です。過重にならないように、オーバーフローしないようにすることに一番注意してあったということだと思いますね。その結果が、リーマン・ショックにつながってしまったということなんですよ。

しかし、それは中東が原因ということではなかったと思います。特にアメリカの金融経済に対する行き過ぎた考え方、それが問題であったわけで、当時は脱石油でシェールガスとか、そういうものに転化していったわけです。当時石油が不足状況だったんです。そのころ、アメリカは石油開発をやめてシェールに転換したんじゃないかな。エネルギー需要をシェールでまかなおうとした。ところがそれがうまくいかなかったでしょう。たとえば、穀物に対する水の供給がなくなってしまったことによって、アメリカの穀物の生産が減ってしまった。そのことによって穀物価格が暴騰したこともありました。

これは水が減ったということと同時に、穀物を作る人たちが農業を辞めて土地をシェールの開発業者に売ってしまった。そういう問題です。そして穀物不足で、穀物相場は値段が上がって、世界的にインドなどで穀物が不足するとか、米がないとか、そういうようになってしまったんです。

石油の不足、穀物の暴騰、世界中が非常に不安な気持ちになつていたときに、リーマンブラザーズという会社の破綻が重なったわけですよ。そういう時期があつて、一時的に景気が後退することがあつたわけです。これは中東が原因ということではなかったと、僕は思います。

レヴェント・特に親しかつた中東首脳とは誰だったでしょうか。

福田・ザイードさん、当時は亡くなっておられたけれども。その息子のムハンマド皇太子、国王的な立場で活躍しているけれども、彼とは親しい関係というか、昔一九九〇年湾岸戦争のときにアブダビに行きました。そのときにザイードさんにも会つたし、皇太子のムハンマド、彼にも会つたことがあります。そういう経験をお互いに持っているものから、割合と気楽にいろいろ話ができる関係にありました。

また、ムハンマド氏は非常に日本に対して関心の強い人です。なにに関心を持ったかという、大和魂ではないけれど

も、武士道というものに非常に関心を持って。要するに彼の関心はどういうことかというところ、日本は戦後日本全体が焦土と化して、しかしそこからどうしてこんなに急速に立ち上がったのかということ。西ドイツもそうですけれども。

日本はアジアだから、それほど進んでいる国ではないと思っただけかもしれない。それが急速に発展したのはいったいどうしてなのか、なにが原因なのかということから、武士道なのではないかと考えたわけです。

レヴェント…それをモデルに取りながら自分の国の発展を考えていたのではないかと思います。

福田…そう、その通りです。そこで人材育成が大事であるということに思いが至って、当時日本人学校というものがアブダビにありました。日本人学校といっても、生徒が三〇人ぐらいの小さな学校です。そこに自分の子どもまで入れてくれという提案がありました。しかしそれは無理としても、アブダビの人を三〇人か、四〇人かの学生を受け入れてやっています。日本人的教育をしています。

非常にありがたいことで、したがって、日本にとって大事な石油の調達も順調にいらっていると。新しい契約を日本に与えてくれるといったようなこともありますし。ですから相互協力は非常に順調にいらっていると思います。

レヴェント…両国関係を資源だけではなくて、全面的に考えるとのことですね。

福田…できることはなるべくしていこうという考え方ですね。

レヴェント…その中で資源確保もできますね。

福田…そう、そうです。アブダビも脱石油を考えているわけでしょう。石油資源は枯渇する可能性がある。そのあとでどうしたらいいかと、自分たちが生きていくために必要かを考える。特にアブダビの場合には緑化事業をしていますよね。緑化するためには水が必要です。しかし、水がないわけですよね。だけれども、海水を淡水化することによって、今はそういう水をつくっているわけです。淡水化の装置を向こうに提供することはしてきたわけです。

でも淡水化するためには、その装置を動かす電力が必要なのです。電力はなにからつくるか、石油を燃やすのかどうかという悩ましいことがあるのです。そこで考えたのが、いまはソーラー発電でしょう。アブダビはソーラー発電をずいぶんやっていますよ。砂漠中、ソーラー発電を展開していますけれども、そういうことについて、お互いにいろいろな知恵を出し合うと、協力しようということですよ。

レヴェント…話が変わりますが、福田総理はイエメンとな

にか特別な関係がありますでしょうか。

福田…私の友人がイエメンの人と親しくなっていて、イエメン協会をつくらうと言っていました。私にその会長をしてくれと言うのです。どんなことになるか分からないけれどもそうしようと、私が会長になって、会長としてなにかしなければいけない。そこで、イエメンの国に行つて、サレハ大統領、彼とお付き合いするようになりまして、日本の中にイエメン議員連盟をつくりまして、大統領が日本に来れば、彼は二回来ました、議員連盟の人が集まって歓迎をしましたけれども。ですから、サレハ氏は私を非常に信用してくれていたと思います。

イエメンに対してなにか要求することは、私は考えていなかった。なにかしてくれるようなことがあればいいけれども、しかしそれを求めることはしなかったです。それはまさに、国民と国民のお付き合いをしようと始めたわけですから。

そういう意味において、日本は民間の人たちが努力してそういう関係をつくる、いろいろな協会、友好協会、そういうものをつくることに努力してくれた人がいます。いま野田という女性大臣がいるでしょう。

レヴェント…そうですね。

福田…野田聖子。彼女のおじいさん、野田卯一、この人はなかなか偉い人で、国会議員をやっています、アジアのすべての国々との関係をつくらうということで、一つ一つ全く民間の協会をつくりました。その多くはいまでも存在します。

一 イラク戦争について

レヴェント…次の質問です。二〇〇三年三月、米国が主体となり、イギリス、オーストラリアなども参加して、大量破壊兵器保持を理由とするイラク自由作戦のもとで、イラク戦争が始まります。ドイツやフランスなど一部の欧州国が反対し、国連決議もないまま米国主導によるイラク戦争ですが、日本は英国よりもいち早く米国との同盟を重視した上で、支持を表明します。

それで復興支援として自衛隊も派遣したということですが、当時福田先生は小泉政権で官房長官をやっていたらしゃって、イラク戦争を日本側の当事者として間近で経験しておられたと思います。当時のこういった経緯。要は日本政府の米国、イラク戦争への支持表明への経緯、または日本政府のスタンスについて、ちょっとお話しただけですしょうか。

福田…そんな簡単にしゃべれることではないよ。経緯は長
いからね。簡単にお話しすれば、それはやはり日米同盟とい
うことがある。日本は賛成するとはいっても、日本自身が戦
争をするわけではない。それはアメリカも当然知っている。
当時は、なるべく賛成する国を増やしたいとアメリカは思っ
ていた。だから日本は戦争には参加しないけれど、賛成はし
てくれという要請があったわけです。これは、ぜひそうして
くれという強い要請があった。

当時は小泉首相で、彼は戦争を開始する寸前まで、ブッ
シュ大統領に対しては、戦争はよくない。戦争をしないで平和
的な解決をしようということをやつと言い続けてきたわけで
す。これはあまり表面には出ていません。一般には報道され
ていないけれど、そのように言い続けてきた。ただ、もしど
うしても戦争するのであれば、それは支持する。アメリカ
が決めてしまったあとでは支持する、そういうことを言った
時があります。

その言葉のとおり、支持するという表明はした。しかし、
イギリスのように、支持すると言いながら自分たちも戦争に
参加した国もあるわけだから、イギリスとは立場が全く違
います。

レヴェント…日本側ですか。

福田…日本は。最初からブッシュ大統領に日本は、戦争最
中に軍を送ることはできないということは言っていた。そ
ういうことを承知の上で、アメリカとしてはできるだけ賛成
してくれる国がほしい、数を増やしたいということで、そう
言ってくれるだけでもありがたいということだったわけ
です。そこまで言われて、ノーと言う理由はないわけです。特
にアメリカはどうしても攻撃すると決めてしまったのであれ
ば、これは同盟国として、決めてしまったことについて反対
するとかそういうことはできない。そういう意味です。

ただ、戦争はしないほうがいいということは、ずっと言い
続けてきた。だから戦争をするには国連決議を取ってくれと
いうことも何度も言った。その前の段階だけれど、そのため
に国連で新しい決議をするような努力もアメリカはずいぶん
してきました。

残念ながらドイツ、フランスが戦争反対と言い続けた。僕
等は戦争をしないためには、アメリカがイラクに対して核兵
器などを廃棄するようということを言っている、そのこと
について、フランス、ドイツももっと強く言ってくれば、
もしかしたらフセイン大統領はそうせざるを得なくなつたか
もしれない。ただ、フセインとすれば、フランスやドイツが
戦争に反対するのであれば、アメリカも戦争しないか

もしれないという期待をした可能性がある。これはつい最近の、対北朝鮮の問題も似たようなものです。北朝鮮からみれば、アメリカが核をやめろと言うけれど、しかしロシアなどがひょっとしたら助けてくれるかもしれないと思えば、それは自信を得るわけです。

今、現実にはそうじゃないですか。なかなか核をやめないのは、中国とかロシアがいざとなれば守ってくれるんじゃないかという期待があるのじゃないですか。そういう駆け引きをしているわけです。

フセインもそういう駆け引きをしたわけです。だけどその結果、アメリカはどうしてもやるといつてやった。それでフセインも命を落としたわけです。金正恩はそういう道を望むんですかということ。金正恩はそういうことを見ています、知っています。だからそこまではできない。アメリカが本気になったら、これは怖いという気持ちがあるんじゃないの。そういう微妙な駆け引きの問題があるので、何とも言えないところがあります。

アメリカもフセインに対して、何とかして核兵器をやめさせようと思ったわけでしょう。そのために二年も、もつと長く交渉をずっとしてきているわけです。一九九〇年の湾岸戦争以来、ブッシュのパパは戦争をやった。あの時はうまくや

った。しかし徹底的にやらなかったから、フセインを生かしておいたから、そのあとフセインが勝手なことを始めてしまった。一〇年たったら、まさにそういうことです。それで九・一一のテロが起こった。今度は自分がこれを何とかしなければ自分のメンツが立たないと、もしかしたら思ったのかもしれない。

レヴェント…国際的に非難を受けた一番大きな理由は、国連決議が出なかったというところですよ。

福田…それはフランスとドイツが反対したからです。フランスとドイツが「アメリカの言うとおりだった、イラクは核はやめろ」と強く言ったら変わったんじゃないかなと僕は思っていました。だから日本からも、ドイツ、フランスにも特使を送ってそういう説得をしたこともあります。

レヴェント…そうなんですか。

福田…でもなかなか説得できなかった。

レヴェント…彼らは固く反対したということですね。

福田…そうそう、固く反対した。それはイラクが解放されたあとで、どういう分け前をもらえるかということ各国は考えたんじゃないの？

レヴェント…なるほど。

福田…国際政治というのは、わからないところがあるから

ね。

レヴェント…小泉とブッシュの首脳会談で、小泉首相から米国側に、戦争中に日本が支持しても戦闘地で、言い換えれば戦うという形ではなくて、たとえば資金提供などという他の形になることを予め言って、その結果日本の支持し方について既に前もって向こう（レヴェント註…アメリカ政府）の理解はあつたということですか。

福田…アメリカですか。

レヴェント…はい、アメリカです。

福田…もちろん、もちろん。十分ありました。だからアメリカも、あれしてくれ、これしてくれというような具体的なこととは何も言わなかった。日本はその後、自衛隊を送ったのです。戦争が終わってからです。

レヴェント…要はアメリカ、イギリスの軍隊のように戦闘地では戦っていないということですね。

福田…そういうことです。

レヴェント…当時の日本のメディアなどを見ると、いっぱい批判されていますね。

福田…テロとの戦いだよ。でも、国家的な戦いというのは五月に終わっているわけです。その終戦の仕方がアメリカもよくなかったと思う。あとにテロを残してしまったというこ

と。

レヴェント…その理由ですが、大量破壊核兵器保持という、あとになってアメリカ側で米国議会に出された報告書も立証したし、英国でもブレア批判に回ってくる報告書が出されましたが、結局なかったという点はいかがお考えですか。

福田…これは正直言つてわからない。国連事務総長まで、あると言つてね。それでパウエル国務長官が発表してしまうわけです。アメリカとしての見解、国連への報告とかそういうものを踏まえて、調査団も送つたわけです。結果的に言えば、アメリカに何とかだまされちゃつたではないけれど。でもそれはパウエル国務長官ですらだまされていた。そういうことでしょう。

レヴェント…同じアメリカ人でさえだまされていたということですね。

福田…ええ。だからそういう陰謀があつたということになるのであればね、はたして本当に正しかった、良かったのかどうか。これはいろいろ議論あります。でも戦争をしてしまつたし、それが終わって結論が出ちゃつた。あと残つたのはテロなんだ、大規模なテロなんだ。そして混乱なんだということだね。

それはアメリカがわれわれに対して説明してくれたのと大

分違う。

レヴェント…ああ、そうですね。

福田…今は、それはフセインをやつつければ、あの国は民主国家になって、経済も繁栄するし、安定した地域になるんだという説明ですよ。そうではなかった。

レヴェント…日本側はそれを一〇〇%信用したということですね。

福田…信用した。というのは、大量破壊兵器があるということは、かなりの確度でそうだとするように信じていました。ほかに情報がないんだから。

レヴェント…そこを聞いたかったんですが、日本国家として独自に現地についての情報とか、そういうのがあって、こういう支持表明をしたのか。それともアメリカ側から流れてきた情報に基づいて支持表明になっていったかというところですね。

福田…あの時の情報というのは、あそこで交渉している当事者たちからくる情報が中心です。だから国連の人がどこまでやってくれたか知らないけれど、国連が専門家が入って中立的な立場でやってきている。IAEAの事務総長まで入ってやってきているわけです。それでアメリカの国務長官がそれを発表するわけだから、信用せざるを得ない。それを

信用しないと云ったら、これこそ国際紛争のもとになります。

それからイギリス、ブレアはものすごい批判を受けたけれど。

レヴェント…そうですね。

福田…あそこは批判を受ける理由があります。二〇〇人以上が戦死しているでしょう。あれは戦争を始める前でもすでに一二〇人か三〇人か死んでいます。ブレアも評判の悪いことをしていた。それで猛烈に躊躇した。だから支持表明をする。日本もしたけれど、イギリスの支持表明をすべきかどうか、いつするか。しないわけにいかない。英米関係が壊れてしまうということで、表明はするけれど、いったいいつすればいいのか。日本が先にしてくれたら、そのあとに表明したいなと考えたんだよ。

レヴェント…そういう話は、イギリス側は持ってきたんですね。

福田…それは僕のところにはきた。

レヴェント…そうですね。福田先生のほうに來たのですか。

福田…当時のイギリスの大使からね。そういうのはイギリスもメンツつぶすわけだけどもね。日米関係にも必要ないし

ね。

レヴェント…イギリスよりも早く支持表明したのはそこにあるわけですか。関係ないですか。

福田…小泉総理が記者会見して支持するという表明をするのは、その日の一二時だったかに決まっていたんです。ですから日本は支持するかどうかは、日本の総理大臣のスピーチを見てくれるというように回答したわけです。

レヴェント…イギリス大使にですか。

福田…確約を与えなかった。

レヴェント…イラク派遣の自衛隊で当時、戦死者は出たんですか。

福田…ゼロです。

レヴェント…ゼロですね。当時イラク戦争への自衛隊派遣について憲法違反とかいう意見もありましたかと思いますが、たしかに名古屋高等裁判所あたりでそういう判決も出ていました。

福田…だからあのテロ行為を戦闘行為だというように理解をすれば、それは戦争です。しかしテロか戦争かという定義の問題があるわけです。法的な解釈の問題があるわけです。やはりテロはテロだ、戦争じゃない。戦争というのは国家間の争いでしょう。国家意志が入っているわけ。テロは何だか

わからない。グループが争っているわけで。

レヴェント…サダム・フセインはテロリストになるという解釈なんですね。

福田 いや、フセインは国家の元首です。国家の意志です。テロは誰の意志かよくわからない。みんなदैいつて何だかよくわからない。部族的な争いもあるかもしれないね。

レヴェント…しかし日本政府が自衛隊を派遣することの意図というか、フセインに対してではなくて、その国にあるテロリストたちに対して。

福田…フセインが死んでしまったからね。

レヴェント…そうしたら憲法九条との矛盾も別に生じないということでしょうか。

福田…ないんです。ないんです。ただテロの規模は大規模になって、それは将来国家を形成するとか、国家になってしまふようなことになる、これは国家、もしくはそれに準ずる集団ということになって、場合によっては憲法違反ということもあるかもしれない。ただ戦闘行為はしていませんから。攻撃は受けただけ、こっちから撃つてはいませんから。

二 イランとの関係について

レヴェント…次の質問ですが、二〇〇八年、首相在任中に当時のイラン大統領、アハマディネジャドに会われているかと思えます。当時のイランとの関係について教えて頂けますでしょうか。

福田…それはたまたま会ったのです。食糧サミットというのがイタリアのローマでありました。その時に会議の合間に会って、一時間ぐらい論争したけれどね。

レヴェント…論争というのは、国際関係的なことですか。

福田…うん。イランが経済制裁を受けていたでしょう。

レヴェント…はい、そうですね。

福田…だから何でイランはそういうことを続けるか。そのことによって経済が成長しないで国民に不利益を与える。そういうことをなぜ続けるか、簡単なことじゃないかと。あんなは経済制裁を受けないように核開発を透明化するのがいいんだよ。たとえばIAEA（レヴェント註：International Atomic Energy Agency）から専門家を呼んで見せるとか、そういうことをしたらいいじゃないか。それも、あそこであそこだけ見て、ここは見せませんとか、そういうことじゃなくて、自由に見せたらどうなのか。そのことによって経済制裁もなくなるし、経済的な国際間の交流も活発化するし、経

済は活性化するし、日本だって技術提携をするとか、そのようなこともできるんだよ。そういうことを議論した。

彼もそれはそうなんだよ。反対しにくい。

レヴェント…認めているというか。でもなかなか「うん」と言えないんですね。今の北朝鮮と似ているような気がします。

福田…似ているね。

レヴェント…彼らもそこまで透明じゃないので。

福田…北朝鮮の場合には上に誰もいない。金正恩が決めています。アハマディネジャドは上に宗教があるんですよ。

レヴェント…宗教のリーダーがいるということですね。

福田…だから、自分はそう思うけれど、ただできないなと。そういうもどかしさですよ。本当に顔にそういうふうに書いてありましたよ。

レヴェント…なるほど。それでイランの大統領と会うことによって、アメリカと何か問題はなかったですか。

福田…問題ない。そのあとで、G8サミットで、僕はイランに行つてアハマディネジャドに会ったよと言ったら、「それはどんな話した？」と逆に聞いてきた。

レヴェント…誰ですか。ブッシュですか

福田…ブッシュ。

レヴェント…ああ、そうですか。ブッシュにその話したんですか。前もってじゃなくて、やってからという話なんですか。

福田…あとの話。結局アメリカが交渉しても、向こうはぜんぜん駄目なんだよ。長い争いだからね。彼らはいったい何を考えているのかわからんということは、ブッシュも非常に関心は持っていて、何とかしたいという気持ちはあるけれど、現実には話をしても、どうもうまく通じない。自分自身がやっているわけじゃない、やらせているわけだけれど。どうも話がうまくいかないという気持ちをずっと思っていたんじゃないですか。何か突破口がないかなということ。

日本は伝統的にイランとはずっと付き合いがあるし、アメリカはそれを快く思っているかどうか知らないけれど。経済制裁とかそういうことがあると必ず日本に対して、交流やめてくれとかいろいろなことを言ってくるけれど、日本はイランとは歴史的な付き合いがあるから、付き合いはしますよと。たとえば経済制裁とか、そういうことになるば、それはできるだけ協力はしますけれど、お付き合いはしますということは言っているんです。

レヴェント…アメリカ側にですか。

福田…アメリカに対して。これははっきり言っています。

彼らも、それはもうしょうがないと思ってるんです。

レヴェント…別にアメリカ側からの反対とかそういうのではないんですか。

福田…反対できないでしょうね。そういう時に言うんです。アメリカだって話ができないんだったら、日本ぐらい話ができるチャネルを持っておいたほうがいいんじゃないですかと言う。

レヴェント…やはりアメリカはそういうふう思っているんですね。

福田…思っている。少なくともブッシュの時代まではね。

レヴェント…ブッシュはそういうふう思っていたわけですね。

一三 アフガニスタン問題

レヴェント…二つ前の質問とちよつと関連しますが、アフガン戦争は、一九七九年から一九八九年までまずソ連が入っていて、そのあとは二〇〇〇年代になってからアメリカが入っていった。アメリカによるアフガン戦争への日本の協力がありましたでしょうか。自衛隊の派遣とか、資金提供などがアメリカ側から要求されたでしょうか。

福田…これは、請求はされない。しかし日本としては何か

やろうということはいろいろ考えました。工夫した。結局何をやったかというところ、結論は洋上の給油活動。要するにタンカーに油を載せて。あのへんはいろいろな国のタンカーとかフリゲートとか戦闘用の船などたくさん来ますので、そういうのに給油してあげた。これは喜ばれました。喜ばれたし、なおかつ経費が安かった。給油の油の代金だけだから安い。非常にいい効果がありました。

レヴェント…アフガン戦争の自衛隊の派遣というのは、米
国側からそういう話はなかったのでしょうか。

福田…アフガニスタンは最初から戦闘行為だからね。だからカナダなども、戦争行為をすることなど絶対駄目だということ柄なのだけれど、簡単に考えて、すぐ終わると思って行って、なかなか終わらなくて、結局八〇人か九〇人死んだ。もう一〇〇以上死んだんじゃないですか。それで二〇〇九年ぐらいにカナダに行って、向こうの偉い人に会ったら泣いていました。「こんなつもりじゃなかったんだ。カナダは平和国家をうたいものにしていて、それが戦争行為になって八〇人、九〇人も死んでしまった」と。

レヴェント…カナダ人ですね。

福田…だけど、それだけ死者を出して、成果を挙げられないでやめるわけにいかない、だからまだやめられないと言っ

ていた。本当にかわいそうだね。結論がなかなか出ないんだから。結論が出れば成果があったということになるけれど、そうじゃないですから。

レヴェント…政治家でも国際政治経済学者でもあり、自民党の議員もやっている浜田和幸先生の『大恐慌以後の世界』という本の中で、「福田先生の首相在任中、実はアメリカからアフガン戦争への自衛隊の派遣という話があったが、福田首相はそれを断った」ということを書いています。それに基づいて聞いていたんですけれど。その他、もちろん巨額資金提供も求められたと。

福田…あれはアメリカが強く言ってきたのは民主党政権になつてからじゃないの。そう思いますよ。それができなくて、逆に、民主党は給油をやめてしまった。それでアメリカのほうは面白くないような顔をしたらしいんだよね。だからアフガンには金を出したんだよ。これは大変なお金を出した。五〇〇〇億円を出した。五〇億ドルです。

レヴェント…日本がですか。

福田…日本が。何でそんなことをするの。給油をずっと続けていけば、アメリカも文句言えないし、そうすれば年間に一億円とか、そんなもので済んだんだ。五〇〇〇億円ですよ。五〇億ドル出した。民主党政権は出さざるを得なくなっ

てしまった。ばかばかしいんだよね、本当にね。

レヴェント…福田先生の首相時代はそうではなかったということですか。

福田…僕の場合は給油活動をずっと続けていたから、むしろ積極的にやっていたからね。アメリカとしては文句言えないし、むしろ大変ご機嫌だったと思います。

一四 民間外交について

レヴェント…外交の現場を担うのは、政治家と外交官だけではないと思います。外交を遂行する上で、政官界の人、政治家、外務省などと、NGO、NPO、商社、企業や民間知識人との政策レベルにおける対話もあるかと思っています。

したがって、戦後日本の中東認識、政策における、官僚でも政治家でもない民間の人や団体の役割、いわゆる民間外交、別な言い方をすればパブリック・ディプロマシーの役割があったと思いますか。

福田…民間の人たちがお互いに意見を交換し、お互いの文化を楽しむようなことをすることによって、国民同士の信頼ができる。そのことがやはり外交の基礎として必要なことである。これは外交というものではありません。しかし、そういう積み重ねによって、国がそれを利用するといったら

ね、国がその結果を利益する、国が命令したわけではない。

それは民間人同士がそういう関係をつくっていく、特にいまのようなグローバル化の状況の中で、国民同士がたとえば働きに行くことも含めて。あなたもこうしてやってくれているわけです。そういうことによって、そういうことの積み重ねが結局世界を平和に導いていく原動力になるのではないかと、私は思います。

そういうことをしていかないと、政治というのはどちらかというと争うものです。少しでも利益を増やそうとか、別にその政治家がどうこうというのではないけれども、そういうことをすることによって、国民から褒めてもらいたい、評価してもらいたい、そういう考え方を持つのが政治家ですよ。特に民主主義の場合には、そういう傾向が強いですが、そういう考え方はどうしてもお互いぶつかり合う、けんかし合う、そういう関係に陥りがちなものです。本来、そういう性格のものがあるから、そういう政治は時としてぶつかり合って交渉がうまくいかないときに、国民同士が、たとえば島の問題があるよと、その話はそう簡単に解決しないだろうと、解決するまで待っていていいのかと、そういうことですよ。

解決するために何一〇年もかかるかもしれない。日本も北

方領土の問題とか、これも七〇何年かかっているわけです。

中国とは尖閣列島があるしね。韓国とは竹島があるし。こういうものは一日、二日では解決しないですよ。しかし、政治的には、もしくは外交的にはぶつかるときがあるのです。

でもそれはそれとして、普通のお付き合いをしていきましようよと。でないと、ほかの多くの国民がお互いに惨めな思いをしていなければいけないじゃないかと、不幸じゃないかと。みんなを幸せにするため、将来のことを考えて長い目で見て、その国と国との関係は考えていきましよう、これがパブリック・ディプロマシーの基礎、基本的な課題だと思います。

レヴェント…実は次の質問はそれだったのですが、教えていただきました。ありがとうございます。パブリック・ディプロマシーとはなんですかということを伺いたかったのですが。やはり国民と国民同士の関係のことですね。そこであるNGO、NPOがつくられていて、政治家または国はその結果を利用するだけであるとのことですね。

しかし、協会、NGO、NPOをつくるのに、最初の段階で国のほうからサポートを若干することが必要なのではないかと思うのですけれども。

福田…必須条件ではありません。しかし、あったら便利と

いうことはあるかもしれないです。でもそういうことは、国民のほうで考えなければいけないことではないでしょうか。だからそういう国民に対する教育は大事です。学校教育でもいい、社会教育でもいい。そしてまた外務省はパブリック・ディプロマシーが大事だということを考えているのであれば、いろいろな情報を提供すると。そして国民が動きやすい状況をつくってあげる、これが政治家の仕事、外務省の仕事です。

レヴェント…福田総理は政治家で、官僚と異なっていると思っておりますが、外交官、つまり伝統的な外交を遂行している外務省の官僚は、パブリック・ディプロマシーの人間をあまり快く思っていないと思います。少なくとも私の意見・観察はそうです。

福田…すべてがそうじゃないと思います。それはあまり上等な外交官じゃないよ。

外務省というのは、要するに自分たちがこういうことをやるのだと法律で全部決まっているわけです。そして偉くなる人たちは、二年ごとに変わってしまうということがあるでしょう。今まで中東をやっていた、それが急にアメリカに行ってしまうということが平気で行われる、そういうところからね。

ですからずっとその国のことばかり考えている人たちは、当然考え方が違います。そうでしょう。同じことではないと思います。中にはあの国が大好きで、自分はこの仕事をずっとやっていたいという人もいます。でも、偉くなる人はそれではできない、偉くなれない。方々いろいろなこと、全般を知っていなければいけないという宿命がありますから、それはやむを得ないですけども。

レヴェント…伝統的な外交でできることとできないことがあって、できない部分をパブリック・ディプロマシーのほうでやってみようという点についていかがお考えでしょうか。

福田…外交でできないことをすべてパブリックでやれるかという点、そういうことにはならないかもしれないけれども、しかし、基本的な国民同士の相互理解がなければ、その上に外交を組み立てようといってもなかなか難しいことはあります。特に政治家の場合は、国民から評価されなければいけないということがあるからね。あることを言うとな国民が喜ぶといえ、そのことばかり言う人もいるかもしれないし。

レヴェント…パブリック・ディプロマシーに関して、中東政策で具体的に話しますと、中東調査会、一九五六年にできているのですが、日本アラブ協会、五八年、中東協力センター、これはオイルショックのとき、七三年以降ですけれど

も、こうした団体が戦後民間外交を遂行する上で大事な役割を果たしたかと思いますが、これらの団体の役割について、具体的にお話いただけますでしょうか。また、アラブ協会と福田先総理の関わりについても、伺いたいです。

福田…これは少し難しいですね。みんな性格が違うのです。誰がやっているかが一番大事です。やっている人によって、その協会の性格も変わってくるということもあります。

私は正直、アラブ協会は、中谷武世さんを知っているからアラブ協会を知っているというぐらいのものです。そのあとの人も知っていますけれども、じゃあアラブ協会と一緒ににかしたかという点、そういうものはあまりない。

中東調査会というのは、シンクタンクとか、そういうようなところがやっているものではないでしょうか。これも私は正直言ってよく分らない。

レヴェント…中東協力センターは。

福田…これはJICAとか、そういうようなところが中心になっているのではないですか。これは実務的ですね。

レヴェント…中東協力センターですか。

福田…うん。それから企業とかね。

レヴェント…中東協力センターはどちらかというと、当時の通産省の外郭団体で、中東調査会は、当時は外務省の外郭

団体、アラブ協会はどちらかというときまさしく民間、中谷武世先生がやっていたところかと思います。

そしてここには挙げていないのですが、お父様の福田赳夫元総理が中東に歴代首相で初めていらつしやった一九七八年、あの歴史的な訪問から帰ってきてから、中東文化センターがつくられています。福田赳夫先生の命令で初めて、それまでの資源確保論のなところと違って、中東と文化的、教育的な面でも関係を強めていかなければいけないということがありました。まさしくその訪問中、私が知っている限りでは中東文化ミッションというのが、日本から派遣されています。国立民族学博物館の初代館長である梅棹忠夫先生が団長で東大の板垣雄三先生などがそのメンバーを構成されています。

福田…パブリック・ディプロマシーとか、要するに外交官に任せる外交以外の外交が大事だということを承知していたから、そういうことをしたのです。ニクソン・ショックのころ、一九七一年に（昭和四六年）ですね、そのころは日米関係が人的に、非常に希薄になったというので、そのころジャパン・ファウンデーション（国際交流基金）をつくったのです。

そのとき福田赳夫は、外務大臣です。外務大臣として、外

務省が普通はやらないような人的交流をしましょうということとで、もともとは日米関係を中心に考えたわけです。いまはいろいろな国、やっていますけれども。そういうパブリック・ディプロマシーというか、本来の外交、伝統的な外交、そういうものだけでは外交はできないと考えた。おそらくほかの外務大臣ではあまり考えないことを考えたということですね。だから、中東についても同じ。やはり人的関係なくして外交は存在し得ないということを考えておった。

一五 中東民間外交のキーパーソン

レヴェント…中東民間外交の重要人物として、いままでの話の中にもところどころ出てきたと思うのですけれども、中谷武世、田中清玄、小林元、林昴、これらの名前は代表的なものではないかと思いますが……。

福田…あの方がいるじゃない。山下太郎。

レヴェント…アラ石ですね。

福田…うん。これは極めて大事なんじゃない。私の知る限りは、アラビア石油は、昭和三年ぐらいに山下太郎さんが一生懸命取り組んでいたテーマですよ。それはやはり日本政府の応援も必要としたんじゃないかと思います。

レヴェント…そこで彼をサポートしている具体的な名前と

かありますでしょうか。

福田…福田越夫。あの当時、自民党政調会長をしています。それで彼の仕事に対して応援をした。

レヴェント…山下太郎と福田越夫様の話を、もうちょっといただけますか。

福田…これは、僕が話の中身はあまり聞いていなかった。

レヴェント…でも面識があったということですか。

福田…しょっちゅう家に来ていました。

レヴェント…そうなんですか。

福田…何度も来ていました。僕も会っている。アラビアに行って帰ってくると、その報告に來たりしていた。

レヴェント…その他に、私が知っている限りでは、岡崎勝男という政治家は顧問で、結構サポートしているというのが、山下太郎に関する本から読み取ったことなんです。

福田…そうですね。その頃の財界人はどのようなことをしていたかは、私にはちょっと分かりません。岡崎さんも年をとってしまったから、そのころはあまり影響力がなくなっていた。仕事の面ではあまり関係なかったと思う。その前に岡崎さんは外務大臣などやっていたからね。吉田内閣、だいたい前ですから、仕事では関係ない。いわゆる人を知っているから、人を紹介するようなことだったかもしれない。

それで、山下太郎さんは、それが昭和三四年でしょう。四年のオイルショックがあつて、その頃に日本は、インドネシアも少しやらなきゃいかんということで、既にインドネシアとの関係はあつたのですけれども、別に会社をつくって、そして……。ちょっと待って。これは山下太郎じゃない。田中清玄だ。だから、山下太郎さんはアラビア石油だけじゃないですか。

レヴェント…そうですね。

福田…そうですね。

レヴェント…はい。

福田…山下太郎さんは何年ごろ亡くなった？　わりあい早く亡くなったんじゃないかな。

レヴェント…一九六七年ですね。

福田…一九六七年、昭和四二年。

レヴェント…そうですね。

福田…三三年ぐらいにそのプロジェクトに取りかかって、四二年に亡くなった。だから一〇年足らずですよ。

レヴェント…そうですね。

福田…一八八九年の生まれか。彼にしてみれば、晩年のときに取り組んだテーマ。それを成功させて亡くなったということですね。でも、その成果は大きかったと思います。日本

の自主原油、日本の手によって開発した初めての原油の生産契約・開発契約ですね。それは非常に大きいことだったと思います。そのあと、ここにも書いてありますけれども、杉本茂さんがやってくれたんですね。

レヴェント…そうですね。

福田…これはアブダビ石油です。このアブダビ石油は大変成功して、そしていまでも開発しています。これはものすごくもうかっているんです。山下太郎と同じように、杉本茂は欠かすことができません。いまのアブダビ石油をつくった人です。どういうつくり方をしたかというと、彼はアブダビに行つて国王と会い、アブダビのザイドとか、いろいろな人に会つて、彼が原油の開発利権を取得し、それに成功したのです。その利権をもとにアブダビ石油をつくった。極めて大事なパイオニアです。アブダビ石油はいまでも非常にもうかっていますよね。利権の延長も二年ほど前に成功したし、大成功している会社です。ほかの石油会社と比べても利益上げもうまくやつて、そのルートでアブダビとの関係を強化することにもつながっています。

この杉本茂というのは、丸善石油の人だったのです。丸善石油の副社長をしていたのです。当時の丸善石油の経営は社長長の和田完二の積極経営が金融機関から不信を買い、和田社

長と共に、杉本茂副社長も辞めさせられたのです。そのあと彼が全力を挙げてやったのがアブダビ石油の開発です。

一六 イスラエル・パレスチナ問題

レヴェント…最後の課題に移りたいと思いますが、ちよつと石油や民間外交から離れて、イスラエル・パレスチナ問題についてお話しただきたいです。歴史を振り返つてみたら、一九八一年にアラファトPLO議長が来日しているんです。その前の一九八〇年に、日本・パレスチナ友好議員連盟は、代表・団長を木村俊夫議員が担つて、ベイルートだったか、PLOの議長アラファトと中東でまず面会して、その一年後、アラファトは来日しているという歴史的な事実があるんですけれども、このあたりで、もしご存じのことがありましたら教えて頂けますでしょうか。

福田…いや、全然ありません。要するに、日本は当時、おそらく何かするとしても、格好だけだったと思いますよ。本当に真剣にPLOとかの抱えている問題を解決しようなどといつても、日本はそのノウハウがないんです。

レヴェント…なぜですか。

福田…要するに、そういう歴史的な背景とかというものは何もありませんから、交渉する方向も分からないし、誰と交

渉したらいいかも分らない。だいたいああいうややこしい交渉事は、表に立っている人たちだけで決めることはできないでしょ。やはり陰で、裏で動かす人たちが必要だと思えますよ。だから、そういうことはできない。

それからもう一つは、やはりああいう線引きをしてしまったヨーロッパ、イギリスとかの国々の問題が根本的にあるわけで、そういうところをどうするかということがあるから。言ってみれば、われわれはそういう歴史的な事実の第三者・傍観者ですよ。それを覆すことはなかなか難しい。

だからできることだって、人道援助しかできないんです。人道的な援助。たとえば困窮している人を救うとかね。それは結局人的な、人を送り込むということもあったかもしれないけれども、アラビア語ができないといった問題もあったと思います。そういう人材がいけないということもあった。結局何をするかといったら、お金をあげることしかないんですよ。残念ながら、日本の外交は、そういうことで来たいと思います。

レヴェント…日本はイスラエル・パレスチナ問題に、何回か仲介役を試みたけれども、いま福田総理の話を知ると、イスラエル・パレスチナ問題への仲介には日本のノウハウがないから結局格好だけだったのではないかということですね。

福田…それは現実だと思います。そんなことを考えることができる人がいれば、もうとつくに解決していますよ。その問題はそんな簡単なことじゃないよね。

レヴェント…中東の政治的な情勢の中で、イスラエル対パレスチナ問題は大きな課題だと思うのですが、その問題はいかがお考えでしょうか。

福田…これはもう一〇〇〇年続いている争いだから、そう簡単になんとなる話ではないと思いますよ。

レヴェント…なに問題だと思っていらいっしますか。

福田…そしてこれは同時に、パブリック・ディプロマシーもないじゃないですか。本当に宗教的な争いか。宗教が違っているもお互いに話し合う余地がないわけではないのです。そこは大事なことで、たとえばASEANだってそれぞれの国の宗教は、仏教国もあるし、イスラームも入っているにもかかわらず、一〇カ国もう五〇年かな？

レヴェント…一九六〇年代につくられたのです。

福田…五〇年も無事にやっているのです。争いを起こさない、それはなんなのかということですよ。アジアというのは割合とお互いを許し合うというか、まあ適当にやっているじゃないかとヨーロッパの人は批判するけれども、それで戦争が起これないのであれば、そのほうがすぐれているという

考え方もできないわけではない。そう考えるべきであるという見方もあるのです。

私も著者の一人である『世界はなぜ争うのか―国家・宗教・民族と理論をめぐって―』という本があります。これはもう三年前のプロジェクトですが、政治家と宗教人の対話を本にまとめたものです。結局なにが大事なのかということについてここに書いてあります。これは黄金律、ゴールデンルール、「自分がされたくないことは人にもしない」とその精神です。これはどこにあるかという点、キリスト教にあるのです。だからおそらくイスラームにもあると思うのです。

これは中国でもあるのです。みんな同じなんですよ。キリスト教にしても、中国の論語とかそういうものにしても。いまから二六〇〇年前のものなのです。だけれども、当時、そのころの政治家が考えたことは、どうしたら争いをなくすことができるかということです。その結果できたのが、ああいう言葉なのです。キリスト教の言葉であり、論語の言葉であり、洋の東西を問わずということだと思います。

その基本はなにかといえば、お互いに譲り合おうではないかという寛容の精神です。もし譲り合えば、少しでも、お互いに少し譲ればね。どうしても譲れないところはあります、島の問題とか、これは置いておきましょうと、いずれ誰かが

解決してくれるでしょう、それまで置いておきましょう。しかし、日常のほかのことは全部解決していきましょう、よく話し合いをしましょうと、そういうことです。

レヴェント…まさしく日本の対中、対韓外交は、そこじゃないかと思うのですけれども。

福田…そうしないとやっていけないと思いますね。

レヴェント…そうですね。それは中東の諸国も見習うべき点だと思います。

福田…うん。中東の諸国ももつとそういう考え方。ですから、中東の政治家などと呼んで話をしていくわけです。そういう人の話を聞くと、なかなか難しいですよ。話をしている限りは、なかなかこれはうまくいかないなあと思うけれども。しかしみんながそういうふうな意見を出して、なお戦争をしないで済むためにどうしたらいいかといえば、結論はそんなに遠いところにあるんじゃないですよ。ちょっとお互いにこここのところ、譲り合いじゃないか？

レヴェント…譲り合う。キーワードは譲り合うことです。ね。

福田…譲り合う、だからそれを欧米人に言っていると、原則がないと、原則は大事であると、キリスト教の言葉は大事であるみたいな話になっちゃうわけね。でも、そればかり言ってい

ると争いが起きるのです。そのことよりも、戦争をしないということのほうが大事なのではないかとことです。なにが大事か、やはりお互いに傷付け合うことはやめようということではないでしょうか。

レヴェント…きょうはお時間をいただきまして、ありがとうございました。

質問事項

① 中東の定義

a. 中東とはアラブ諸国、イスラエル、ペルシアだけではなく、アフガニスタン、パキスタンや中央アジア諸国も「中東」の一部という見方もあります。つまり、「広域中東」という概念です。こうした輪郭がない定義についてはいかががお考えでしょうか。さらに中東をどのように解釈しておられますでしょうか。

b. 日本社会の認識上、中東とイスラームが不可分の概念としてとらえられているかと思いますが、同一視され始めたのは、世界と同じく一九七九年のイランにおけるイスラーム革命以降という意見などもあります。小生は二〇〇一年九月一日のアメリカ多発テロ事件以降だと思います。この

点、つまり「中東＝イスラーム」という認識の形成期について、いかが考えておられますでしょうか。

c. イラン・イスラーム革命についていかが考えておられますでしょうか。

d. 日本の中東政策において以下の要素をどのように捉えておられますでしょうか。

— 資源

— イスラーム

— 相互依存性

— 安全保障

② 戦後のアジア外交と中東

a. 一九五五年バンドン会議前後からエジプト、中国、インドといったアジア・アフリカ諸国が冷戦期の二極構造の国際政治へ第三勢力として浮上しました。脱植民地主義的なこうした動きに対する日本のスタンス・政策について、いかが考えておられますでしょうか。

b. 戦後日本外交の中で、中東というのはどういう場所を占めていたでしょうか。やはりアジア外交の中で「エネルギー資源」というファクターにこだわって捉えるべきでしょうか。それとも現地の政情に連動するような、資源を超えた民

族イデオロギー的な側面もあったと思いますでしょうか——例えば、同じアジア民族という意識がありましたでしょうか——。

c. 福田先生がイデオロギー面というよりは、石油資源論に基いて行動しているように思われます。そうした現実主義的な福田首相から見て、中谷のようなイデオロギー面を代表する「アラブ通」ないし戦前からの「大アジア主義」をどう評価しておられますでしょうか。

d. 湾岸危機ですが、米国をはじめとする国際社会は日本が自衛隊員の派遣もしてくれとの期待を有していたと思いますが、最終的に日本政府はそれに答えず、資金協力という形にとどめて対応していました。湾岸危機についてお話を頂けますでしょうか。

③ お父様の福田赳夫と中東

a. 歴代首相の中で初めて福田赳夫元総理は中東に訪問されました。一九七八年九月五日から一二日までの中東訪問においてイラン・カタール・アラブ首長国連邦・サウジアラビアの首脳と会談をされています。福田康夫先生はお父さまのこの訪問に秘書として携わったかと思いますが、当時を振り返って頂き、この歴史的な訪問についてお話しただけです

でしょうか。

b. 福田赳夫元総理とアラブ協会創立者で元改進黨議員の中谷武世との関係についてご存知のことがあれば、お話しただけですでしょうか。

c. 福田康夫先生は政界に入る前に、お父様の福田赳夫さまの下で一四年間も秘書をされたました経験があります。秘書官として接した福田康夫先生から見た福田赳夫像について伺わせてください。

——どのような政治家でしたか。

——福田赳夫さまの中東観について。

④ 福田康夫総理について

a. 福田康夫総理は中東と最初に出会ったのはいつでしょうか。どのような出来事が切っ掛けだったでしょうか。

b. 石油危機時にソ連にも同国の輸出公社との原油価格交渉の為にやっておられますかと存じますが、その訪問について具体的に教えて頂けますでしょうか。まずこの訪問は一九七二年に中東に訪問した時についてにソ連にいらっしゃったということでしょうか。それとも一九七三年に第四次中東戦争が勃発してからでしょうか。

c. 早稲田大学を卒業された後、丸善石油（現…コスモ石

油）に入社し、約一七年間同社にお勤めになりました。丸善石油時代の福田先生について詳細にお話いただければと思います。まずは、なぜ石油会社に勤務しようと思われたのでしょうか。

d. 丸善石油でどんな仕事をされたのでしょうか。また、そのご経験は、後に政治に関わられてから、どのような形で活かされたのでしょうか。特に、中東との関係において、何か影響がありましたか。

e. 何がきっかけで、丸善石油を辞めて、政界というか、お父さまの福田赳夫の下で秘書役をすることを決めておられましたでしょうか。

f. (1) 戦後中東認識、政策を理解する上で、一九七三年に起こった石油危機が大きな転換期だったと思います。石油危機の際、福田総理は丸善石油に勤務中だったかと思いますが、当事者としての同危機について伺いたいです。丸善での個人的な経験や、同じ会社の中で、政財界の人との付き合いの上でおっしゃりたいことがもしあればお聞きしたいです。

(2) 同危機が日本社会や政治、経済界に与えた影響とはなりましたでしょうか。認識と政策レベルを軸に教えていただければと思います。

g. 内閣大臣の任務に就かれたとき、中東諸国とどのような

な付き合いをされたのでしょうか。

― 政策上のブライオリティーとは何だったのでしょうか。

― もっとも親しかった中東首脳とは誰だったのでしょうか。

h. イエメンとの関係についてお聞かせください。

i. 二〇〇三年三月に米国が主体となり、イギリス、オーストラリアなども参加し、大量破壊兵器保持を理由とする「イラクの自由作戦」という名の下でイラク戦争が始まりました。ドイツやフランスといった一部の欧州国が反対し、国連決議がないまま、アメリカ主導によるイラク戦争であったが、日本は開戦に踏み切った米国との同盟を重視する小泉純一郎政権が支持を表明し、復興支援として自衛隊を派遣した。当時福田先生は小泉政権の官房長官でイラク戦争を日本側の当事者として間近で経験しておられますが、当時の日本政府のスタンス（アメリカを支持したことの实情）・開戦支持への経緯について伺えますでしょうか。

― ドイツ・フランスなど一部の同盟国は支持しなかったのに、英国政府よりも早く、なぜ日本政府、小泉政権が支持したと思ったのでしょうか。

― イラク戦争への自衛隊派遣について当時いろいろと「憲法違反」という批判も出たかと思いますが、福田首相は

憲法九条から見る自衛隊派遣の正当性についていかがお考えでしょうか。

j. 二〇〇八年に福田総理は当時のイラン大統領のアハマディネジャドに会われているかと存じますが、当時アメリカの経済制裁下のイランですので、アハマディネジャド大統領との会合はアメリカと何かの問題を起こさなかったでしょうか。また、何のための会談でしたか。

k. アフガン戦争ですが、一九七九年から一九八九年まで、まずソ連がやっていて、そのあとは二〇〇〇年代になってからアメリカがアフガニスタンに入っていた。従って、アメリカによるアフガン戦争への日本の協力がありませんでしたでしょうか。自衛隊の派遣とか、資金提供などはアメリカ側から要求されていたでしょうか。

⑤ 民間外交としての中東

a. 外交の現場を担うのは政治家と外交官だけではないと思います。外交を遂行する上で、政官界の人（政治家・外務省など）と、NGO、NPO、商社、企業や民間知識人との政策レベルにおける対話もあるかと思えます。従って、

―戦後日本の中東認識・政策における官僚でも政治家でもない民間の人や団体の役割、いわゆる民間外交（所謂パブ

リック・ディプロマシー）の役割があったかと思えますか。

―福田総理にとりまして「パブリック・ディプロマシー」とは何でしょうか。

b. 具体的には中東調査会（一九五六年）、日本アラブ協会（一九五八年）及び中東協力センター（一九七三年）が戦後民間外交を遂行する上で大事な役割を果たしたかと存じます。これらの団体や役割について具体的なお話をいただけますでしょうか。また、アラブ協会とご自身との関りについても、伺いたいと思います。

c. 対中東民間外交の重要人物としての以下の名前について、ご存知のことがあれば、お話をいただけますでしょうか。また、これ以外の方で、中東との関係を語る際に重要だと思われる方がありましたら、お教えください。

―中谷武世（アラブ協会の創立者）

―田中清玄（アラブ首長国連邦、アブダビを中心に資

源確保活動）

―小林 元（中東調査会を作った人）

―林 昂（アラブ石油会社のサウジアラビア代理）

⑥ イスラエル・パレスチナ問題について

a. イスラエル・パレスチナ問題についての御意見を伺い

たいと思います。歴史を振り返ってみたら、一九八一年にアラファトPLO議長が来日しているんです。その前の一九八〇年に、日本・パレスチナ友好議員連盟は、代表・団長を木村俊夫議員が担って、ベイルートだったか、PLOの議長アラファトと中東でまず面会して、その一年後、アラファトは来日しているという歴史的な事実があるんですけれども、このあたりで、もしご存じのことがありましたら教えて頂けますでしょうか。

b. 中東の政治的な情勢の中で、イスラエル対パレスチナ問題は大きな課題だと思うのですが、その問題はいかがお考えでしょうか。まず何問題だと思っておられますでしょうか。